
武装神姫サバゲーマーズ

二等海士長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武装神姫サバゲーマーズ

【Nコード】

N7854Y

【作者名】

二等海士長

【あらすじ】

時は西暦2040年。

主人公、小松野陸郎はサバゲーマー。ある日、大きなトイガンを買ったつもりが、気が付けば手に入れたのは手乗りサイズのフィギュアロボだった。

全長15センチの神姫と呼ばれるフィギュアロボは、サバゲーマーの下で新たな戦場に立つ。

サバゲーマー、神姫を買う（前書き）

2040年ともなれば、サバイバルゲームも様相が随分変わる。
インカムの使用こそ禁止されてはいるが、サポートドローンやラジ
コン兵器による攻撃は容認されるようになっていた。
そして――

サバゲーマー、神姫を買う

壊れているような音をたて開いた自動ドア。そこからボビーショップ『コリドー』に入って来たのは、年の頃は二十代半ばの男だった。

レジに立つ店主のギョロリとした目を見据えながら、男は歩み寄って口を開いた。

「金是用意できた。約束の物を渡してもらいたい」

持っている鞆からそこそこ厚みのある封筒を取り出して、男はどこか浮き立つように言った。だが、店主はそんな男に対して申し訳なさそうに言う。

「すまないが、アレはもう売れてしまった。諦めてくれ」

店主の言葉を受け、男は一瞬キョトンとし、次に眉間に皺を寄せた。

「どういう事だ？ 口約束とはいえ、確保キブしておくように頼んだじゃないか」

「小松野には悪いが、倍の値段をつけられた。こっちも生活かかってるんだ」

「倍の値段って、60万円？」

小松野と呼ばれた男は一瞬呆け、店主の首肯を見て、やや落ち着いた。

倍の値段を付けられては仕方無い。金持ちには勝てないのだ。

「だがまあ、利益の半分は私に権利けんりがあるだろ？」

「まあ、ね」

利益の半분을寄越せ、という要求を受諾する店主。そこに、小松野はさらに主張を加える。

「それと、楽しみにしていたのにキャンセルされたダメージに対する慰謝料10万円だな」

「待て……2万円だ。2万円かどうか」

無茶苦茶な要求だが、今後の商売のこともある。店主も詫びは必要だと考えてはいた。だが、10万円は高すぎる。

「金だけではなあ」

呟いて店の奥へと移動を開始した小松野と次の手を考える店主の間は緊張感がみなぎり、火花が散る。

だが、唐突に店の奥から歌声が聞こえてきた事により、そんな空気が打ち砕かれた。

「は？」

『ラ、ラララ』

小松野の視界には、身長15センチ程の小人が自分の身長程もある箱を運んでいる姿が映った。

「店主、あれは何だ」

「知らないのかい。神姫だよ」

神姫、それは手のひらサイズの自律ロボット。

『人類の新たな友人』を目指し、軍事ロボから介護ロボまでを製造する変態企業と、ゲームから地球環境シミュレーターまで手掛ける変態企業との協力により誕生した大量破壊兵器……もとい、フィギュアロボット。

軍事技術と医療介護技術の応用で、サポートロボットとして非常に高い能力と相応のお値段が特徴だ。ちなみに、ランニングコストはそこまで高くはない。

しかし、そんな最先端のロボットが、前世紀の遺物が売り場の大半を占拠している模型屋に居るのは不可解であり不釣り合いである。「どうした、店主。サポートロボットが必要な歳でもなし。店も一人で手が足りるだろうに」

不思議に思っただけで尋ねる小松野への店主の答えはこうだった。

「客引きになるかと思っただけで展示用に仕入れたんだ」

店主が言うには、模型とトイガンだけでは売り上げが厳しいので、最近流行り始めた神姫バトルに乗っかるうとしたらしい。

しかし、初期投資金額の高さがネックとなり、ある程度しか売り

上げは伸びず、客足も今は落ち着いてしまったという。

「店頭ディスプレイも、今は神姫ネットのバトル中継があるから意味が無くってなあ」

店主はそう言っ、店の角にある古ぼけたブラウン管テレビを指差した。

画面の中では、『最新型アーヴアルMk？特集』という番組が流れ、白っぽいフィギュアロボットが模擬戦を行っていた。

わざわざ店頭で見なくても、お茶の間で神姫は見られる。展示の意義は失われ、展示神姫はメーカーに返品される事になった。

「…と、いうわけだ」

「なるほど、よく分かったよ」

つまり、尽力はしてくれたけれど、微力すぎて役に立たないからもうイラネーヤ、ということだなと、小松野は解釈した。

「しかし、これはなかなか」

小松野は荷物をまとめているらしき神姫を眺めてその動作に感嘆した。

動きは滑らか。声も人間と変わらず。今しがたテレビで流れていた番組の通りなら、戦争ゴッコまで可能。

「神姫ってリアルで武装化出来るのかね？」

「そりゃあ、出来るさ。去年まではリアルファイトが主流だったぐらいだから、剣とかライフルとか……買うのか？」

「さてね」

小松野は考え込んでいた。

優れた兵士は優れた兵器に勝る。

手元には、今は亡きアサヒファイアーアームズのM60を手に入るために貯めた30万円がある。M60は確かに優れた機関銃だが、いわゆる骨董品だ。

目の前には、優れた兵士の素質を持っているであろうフィギュアロボがいる。

「いくらだ？」

店主の問い掛けから随分と間が開いたが、それは「買う」という意味の反応だった。

「素体と充電器のセットで2千神姫ポイントだ」

「にせんしんき？ なに？」

「神姫ポイント。神姫関連で使う通貨みたいなもんだ。1ポイントは百円だ」

つまり、神姫1体20万円也。

「たけえよ」

「馬鹿言え。自律ロボットが手のひらサイズに纏められてるなんて、四半世紀前なら億単位だぞ」

確かに店主の言う通りだった。だが

「店頭で展示してたという事と返品予定を聞く前ならな。それに、少し前の型なんだろ」

「あ？ あの神姫エウクランテを買うのか？」

エウクランテというのか。と、小松野は店主に頷きながら思った。

「同じタイプの箱入り新品もあるが……」

「メーカーに返品されたら彼女はどうなる？」

「恐らく廃棄処分だろう。メーカーは中古品を取り扱わないからなら、決まりだ」

小松野は店主に金の入った封筒を押し付けて言った。

「装具一式。それともう一体に装具一式。幾らに抑えられる？」

「50……いや、45万。今日の事を水に流して貰えれば40万でいい」

店主のその言葉に、小松野はゆっくり頷いた。

店主に案内され、小松野はマスター登録用の機械でマスター登録を行う。

今日持って来た30万円と、店主との交渉で得た17万円、合わせて47万円を神姫ポイント化し、4700ポイントを得る。

4700ポイントから、神姫2体分のポイントを引くと700ポ

イント残る。

「700ポイントでも大した装備は買えないんだな。と、いうか、値段が高過ぎないか」

手続きの間は暇なので、側にあったカタログをパラパラと読んでみた小松野は武装の値段に驚いた。カットラスや十手が200ポイント、つまり2万円もするのだ。

「そりゃ、リアルファイトでもバーチャルファイトでも使える武器はな」

手続きを終えた店主が包装された神姫2体と武装セットを持って小松野の後ろに立っていた。

「バーチャルとかリアルとか、関係あるのか？」

「あるさ。リアルファイト用は強度を持たせつつ、剣なら刃を潰し、銃器の威力はエアガン以下。バーチャルファイト用は、エフェクトの設定とか威力、重量の設定とか。色々面倒くさいんだよ」

バーチャルファイトのみならデータ以外必要ないので安い。だが、小松野はあえてリアルでも使える武装を選ぶ。

神姫バトルをすれば、ポイントは百ポイント単位で入ってくるといので、小松野は深刻に考えなかった。

「とりあえず、今日は帰って神姫を起動させてみよう」

小松野は、いそいそと自宅へと帰っていった。

サバゲーマー、神姫を買う（後書き）

エウクランテはリペイントもいいな、と思うのです。

1：悩み事はリア充の証（前書き）

サポートドローンとして神姫に目を付けた陸郎。
高揚ウキウキしながら神姫を起動しようとするが……

1：悩み事はリア充の証

彼の名前は小松野陸郎^{こまつのろくろ}。しがない喫茶店店員で、趣味はサバイバルゲーム。そして、今日は神姫のマスター初日となる。

さて。実は神姫を買って帰ってから2時間も経つのだが、陸郎は未だに神姫を起動させていない。なぜかって？ 名前が決まらないからだ。

「ウムム」

陸郎の目の前には名前入力を待つエウ克蘭テ型神姫。名前さえ決まれば、すぐに起動させられるのだが。

陸郎は店主が「エウ克蘭テ」と言っていたので、それがこの神姫の名前だと勘違いしていた。

自分でも分かる程にネーミングセンスが無い陸郎は、ネットでエウ克蘭テ型と名前の情報を集めた。

その結果

「セイレーン関係無いな」

神姫バトルにおいて、エウ克蘭テ型はセイレーンタイプというのを置き去りにして、どちらかといえば鳥類のように戦っているようだった。

「だったら、空に関連した名前か」

パソコンに空、ソラ、スカイ、と、適当に言葉を打ち込んだ陸郎は、翻訳ソフトが提示した一語に目を止めた。

「シエル」

パソコンと神姫の横たわる充電器——クレイドル——の端子を接続し、神姫の名前^{シエル}を決定する。

『エウ克蘭テ型で決定しますか？』というシステムからの質問に、陸郎はYesを選択して答える。

そして、彼女は目覚めた。

「マスター？」

「そうだ」

「初めまして、じゃあないんだよね」

店で稼働中の彼女を見ていたので、陸郎は頷いた。

「そう……。うっすらとだけ覚えているの。マスターが来なかったら私は――」

シエルは立ち上がると、クレイドルから歩き出て、パソコンのキーボード上に置かれていた陸郎の左手にしがみついた。

「ありがとう、マスター」

「ああ。これからよろしくな、シエル」

そう言いながら陸郎は、空いた手でシエルの頭を撫でる。シエルはうつとりとした表情を浮かべると、まぶたを閉じて

「こちらこそよろしく、マスター」

そう言って、スリープモードに入った。

「初回起動時等はバッテリーを大量消費する、か」

陸郎はシエルを優しく持ち上げてクレイドルに横たえると、不要だと思いながらも布を掛けてやった。

そして、パソコンに向き直る。

「さて、どういうつもりなんだか」

陸郎が開いたページは神姫の情報交換を主に行うサイトだった。

その中でもアーンヴァルMk?のページを開く。

ボビーシヨップ『コリドー』の店主から陸郎が巻き上げた2体の神姫。そのうち1体はエウ克蘭テ型のシエルだが、もう1体はなんと、3日前に発売されたばかりの最新型アーンヴァルMk?だった。

陸郎はてつきり不良在庫を押し付けてくるかと思っていたので驚いた。渡されたのがアーンヴァルだと気付いた時点で『名機らしいけど、店主も随分前の機体を仕入れたもんだ』と思い、家に帰って箱を良く見て、無印ではなくMk?だと気付いた時点で『コリドー』

に電話した。

ひょっとして間違えて渡したのではないかと尋ねる陸郎に、店主は『いやー、欲しがる人って予約してもう買ったし、新規顧客の開拓もウチにはムリだしで、つまり残ってるんだよね』と、のたもつた。

基本的に、神姫は値段が一律2千神姫ポイントなので、最新型のMk?も無印トランシェー1も値段は同じ。だから、店主としてはどの神姫を渡しても変わらなかったのだ。

貰う方としては値段が変わらないならより良いモノが欲しいので、陸郎はありがたく頂戴しておいた。

だが、やはり何かしっくりこないのと、名前を決める材料にするためにアーンヴァルの情報を集めている。

「しかし、役に立たんな」

まだ新型だという事もあってか、サイト情報は見た目の事ばかりで、大した情報はなかった。

「しかし、白子煮とかザイコって徒名はどこから付いたんだか」

陸郎はアンチスレのページを閉じて神姫周辺機器の情報サイトに目を通し、クレイドルに布をかけると発火の危険性すらあるという情報を見つけて慌ててシエルにかけた布を取り去り、今度は神姫用のベッド型クレイドルを探すのだった。

「ヴィルヘルミーネ、入力っ」と

とりあえず名前の見当をつけた陸郎は、アーンヴァルMk?をクレイドルに寝かせてパソコンに接続し、名前入力画面に名前を打ち込んだ。

まだ起動はさせない。2体も同時に運用できる程の経済的な余裕はないし、そんな必要性もない。

時計を見れば既に夜である。陸郎は夕食を買いに近くのスーパーへ向かった。

買い物を終えた陸郎は日が落ちて暗くなった家路をノンビリ歩いていた。

以前なら気にもしていなかったのだが、今日は神姫を連れた人が良く目に付く。

「なんだかんだ言つて、良いもんだよな」

心の持ちようのせいだろうか。陸郎には、周りの神姫連れの人間全員が幸せそうに見え、その中に自分が加わる事に高揚感を覚えていた。

「ただいまー」

「あ、マスター。おかえりなさい」

家に帰った陸郎をシエルが玄関で出迎える。『ただいま』と『おかえり』のやり取りだけでも、陸郎の心はウキウキした。

しかし、浮き立つ陸郎とは裏腹に、シエルは浮かない表情で、どうかしたのかと陸郎が尋ねる前に頭を下げた。

「ごめんなさい、マスター！」

「は？」

玄関で靴を脱ぎかけた陸郎は、思わず手を止める。

そこには、未だにクレイドルに横たわっているはずのアーンヴァルMk？が、シエルの後ろからひょっこりと姿を現して陸郎を見上げていた。

澄んだ水色の瞳と視線が変わる。

「あなたが、私のマスターですね？」

疑問質問ではなく確認行為。視線に込められているのは好意が興味か分からずに、陸郎はただ頷いていた。

1：悩み事はリア充の証（後書き）

次回予告。

予期せず神姫を2体とも起動してしまった陸郎。仕方ないので2人ともサバイバルゲームのチームメイトに紹介しに行く。

次回、『頭上の神姫』

頭上の神姫（前書き）

神姫のマスターとなって数日後、陸郎はシエルとヴィルヘルミ
ネをサバゲ仲間を紹介するために連れ出した。

頭上の神姫

サバゲーマーに必要なけど、サバイバルゲームに必要ない物ってなーんだ？

答え、自動車。

シエルとヴィルヘルミーネが起動してから3日後。陸郎は行き着けのフィールドに2人を連れて出掛けた。

陸郎が愛車の軽トラでサバイバルゲームのフィールドに到着すると、駐車場には4台の車が止まっている。

時刻は平日の10時半を回った頃で、陸郎のようにシフト勤務でもなければ働いている時間帯だ。

一番乗りをして誰か来る前にシエルとヴィルヘルミーネの性能を見ておきたかった陸郎としては、あまり嬉しくない状況となった。

「平日のこんな時間からここに来てる。この4台の持ち主は碌でもない連中ってことだ」

「そうなんですか？」

「でも、マスターの同好の土でしょ？」

ヴィルヘルミーネとシエルが、立て続けに疑問を返してくる。

陸郎としては、自分の事を棚に上げて何を言っているのやら、といった反応を期待したのだが、シエルもヴィルヘルミーネも素直で真面目な性格であり、かつ陸郎に絶対的な信頼を寄せている。

「マスター？」

「ああ。そうだな」

彼女達にとって陸郎は碌でなし等ではない。何故なら自分達のマスターだから。

だから、マスターと同じく平日の午前中からサバゲのフィールドに入り浸る人間も、碌でなし等ではない。

この3日間お互いに触れ合い、陸郎も何とか神姫の思考を理解

していたが、マスターを基準もしくは最高点とする点にだけは馴染めなかった。

「今後は言動に気を付けるよ」

「？」

自分が彼女達の基準になるのなら、あまり恥ずかしい事は出来ない。そう考え、陸郎は襟を正した。

気を取り直して、陸郎はシエルとヴィルヘルミーネに上着の胸ポケットへと入ってもらった。

「マスター、これからどうするの？」

「とりあえず、フィールド使用の申請をしよう」

胸ポケットにうまく収まったシエルの問いに答えた陸郎が、フィールド管理棟に足を向けた所で声がかかる。

「景気がいいねお兄サン！ そんな美人を2人も連れてどこ行くの！」

管理棟の方から陸郎達のいる場所に向かって来る一台のロボット。「マスター、あれはなんですか？」

索敵能力の高さからか、見つけたヴィルヘルミーネが困惑顔で尋ねる。

「ああ、このフィールドの管理人代理で、名前はジャーヘッドだ」
その姿は異様だった。

背丈は60センチ程だろうか。大地を踏みしめる無限軌道キャタピラは重厚かつ流麗に動き、胴から伸びる腕はシンプルかつ機能美に溢れるクローアーム型ジュラルミン製無塗装。

そして、その中心には……炊飯器。

陸郎の前まで来たジャーヘッドは停止して片手に持っていたバインダーを差し出す。

「フィールド使用申請ダス！ 記入をお願いします。」

「なんで炊飯器が？」

炊飯器にキャタピラくっつけて腕を生やしたようなジャーヘッドの姿に、シエルも目を丸くする。

シエルとヴィルヘルミーネに見下ろされたジャーヘッド。なぜかその場で一回転した。

「バトルフィールドでラブロマンスかい？ お坊っちゃん」

「子供なら2人も同時に相手出来ないだろ。今日はフィールドの中心で愛を叫びに来た」

ジャーヘッドのからかいに、ヴィルヘルミーネを起動させるつもりはなかった事などおくびにも出さずしれっと返す陸郎。

陸郎は気付かなかったが、彼の胸ポケットに収まっている2人の顔は赤くなっていた。

「朝かラ見せつけテクレルじゃナイカ。まあ、先に来ているお宅のチームメイト2人も良い雰囲気ダシ、独り者二八辛い戦場ダヨ」

チームメイトが既に来ている事を認識し、使用申請に自分とシエル、ヴィルヘルミーネの名前を書いてジャーヘッドに返す陸郎。

「本当、戦場は地獄だぜ」

「その通り！ ヒーハー！ ごゆつくりー」

妙にテンションの高いジャーヘッドは、キャタピラをキュラキュラいわせながら管理棟へと戻って行った。

「マスター、あのロボットと仲いいの？」

去って行くジャーヘッドの背中を見つめながら、シエルはそんな事を陸郎に聞く。

「ああ。面白いからな」

「そっかー。やっぱり面白みがある方が良いのかな」

「何が？」

どういう意味が分からずに聞いた陸郎だが、シエルは何でもないと言って黙ってしまった。

「マスターって、結構ヒドいですよね」

「だから何の話だ」

ヴィルヘルミーネにまで何でもないですと言われ、この話は終わった。

軽トラの荷台からエアガン用のキャリーバッグを下ろし、陸郎はフィールドへと足を踏み入れる。

「マスター、ゴーグルを着用して下さい」

「おっと、そうだった」

ヴィルヘルミーネに言われて、陸郎はバッグからゴーグルを取り出して着ける。そのまま真っ直ぐ延びる砂利道を歩いて、フィールドの端に位置するセーフティーゾーンに向かった。

道の途中、周りの景色を物珍しそうに眺めていたシエルが何か指差して言った。

「なんだか、丸いのが落ちてるね」

「ああ。B B弾だな」

それは6ミリB B弾という一般的なトイガンの弾だった。この砂利道はセーフティーゾーンへ続く道でゲームエリアではないのだが、流れ弾が飛んでくるとは良くあることだった。

「へえー。これが弾なんだ」

「当たったら痛そうですね……」

「まあ、痛いよ」

興味津々な様子のシエルと、少し怯えた感じのヴィルヘルミーネ。彼女達にとつての6ミリは、人間にとつての6センチに相当する。速度も縮尺を合わせれば時速3百キロ近く感じる速さだ。これは怖い。

そんな話をしながら進むと、エアガンの射撃音が聞こえ始めた。

「お、やってるな」

セーフティーゾーンに付いた陸郎は、ゲームエリアに入っすぐの広場で射撃をしている2人組みを見つけた。

迷彩服のせいで遠目には男か女かの判断も付かないが、陸郎はその2人を見知っていた。

「じゃあ、2人を私のチームメイトに紹介しよう」

「あの2人がマスターのチームメイトなんですか？」

ヴィルヘルミーネが不安そうな顔で陸郎を見上げる。迷彩服を着

込み、顔全体を覆うマスク一体型のゴーグルを付けたサバゲーマーはかなり怪しいので、彼女の怯えも無理はない。

「そうだ。だが、あそこにいるのは2人だけじゃないよ」

わざと説明不足気味にしてヴィルヘルミーネを困らせながらサバゲーマーを見つめる陸郎。

陸郎は射撃の途切れるタイミングを見計らい、フィールドに入つて声をかけた。

「三井、三沢、早いじゃないか」

「あ、小松野さん。チーッス！」

「よお、小松野。M60買えなくて残念だったな」

陸郎達の方を向いた2人組みのサバゲーマー。声からすると、一人はまだ若い女性のように、もう一人は成人男性らしかった。

服装とミスマッチな明るい雰囲気醸し出す2人に陸郎は慣れた様子で、胸ポケットからシエルとヴィルヘルミーネを出しながら話を続ける。

「残念は残念だが、結果オーライだ。私の新しい家族を紹介しても？」

「いいともー！」

「お！アーンヴァルMk？！それにエウ克蘭テか！渋いねえ」

そう言つて2人組みの男の方がズズイと近寄つた。

「俺は純友。すみとも小松野とは幼なじみだ。よろしくな！」

「は、はい！私はヴィルヘルミーネです。マスターともども、よろしく願います！」

「あたしはシエル。これからよろしく願います」

少しの緊張と警戒混じりの挨拶をする2人。そんな2人の態度を見て、陸郎が口を挟む。

「ちなみに、フルネームは三井純友。みいすみともみーちゃんとか、ミツイスミトモって呼んでやれ」

「呼ぶなよ、絶対に呼ぶなよ！」

某芸人の如く“フリ”をして乗ってくる純友だが、ネタが古いせいか2人は乗って来なかった。

それでも、クスクスと笑う2人からは、幾分か緊張と警戒が薄れている事が見て取れた。

「ちよつと、スルーはヒドくないですか？」

いいともー！ と、言ったきりスルーされていたもう一人のサバゲーマーが遂に声を上げた。

「三沢が変なノリなのが悪い。あ、コイツは三沢みく。見ての通り変な奴だ」「ちょ、誰が変な奴ですか！」

陸郎の失礼な紹介を否定する三沢みく。確かに本人の見た目はマトモなサバイバルゲーマーだが、持っているエアガンがいけない。

三沢の愛銃は、何故かピンクに塗られた某スナイパーカスタムのM16。チグハグで目立ち過ぎる。

「別に何色使おうと良いじゃないですか。それに、ピンク可愛いんだから」

頬を膨らませてむくれる三沢は非常に子供っぽく見えた。

「子供かお前は。ところで、千里とレーヴェは？」

「あからさまに話しを逸らしましたね。すぐに来ますよ」

どうやら、他に2人仲間がいるようだ。

「千里さんとレーヴェさんって？」

新しい名前に興味を持ったシエルが尋ねる。

「千里は三井の、レーヴェは三沢の神姫だよ。2人ともゼルノグラード型だな」

「お二人とも神姫マスターなんですか」

「なるほど。だからあたし達の型式も分かったんですね」

ヴィルヘルミーネとシエルが得心がいったという具合に頷いたその時、近くの茂みからガサゴソと物音がした。

茂みから姿を現したのはゼルノグラード型の神姫2体。

「隊長ー。失せモノの回収終わりましたー。あ」

「レーヴェちゃん、『あ』って何か——あら？」

恐らく、この2体がレーヴェと千里だろう。2人の視線が陸郎に……いや、陸郎の腕の中にいるヴィルヘルミーネとシエルに釘付けとなった。

たったかたったか走って来るレーヴェと千里。いきなり三沢の体によじ登り、そこからヴィルヘルミーネとシエルに話しかけた。

「ねえねえ、君達！ 何しに來たの！？ サバゲ？ サバゲだよね！ いや、他の神姫でサバゲやる神姫こがいるなんて、嬉しいな」
「ダメだよ、レーヴェちゃん。そんな一編に喋ったら」

三沢みくの頭の上。そこは、陸郎の肩より少し低い位置。4人の神姫が話すには、丁度良い高さにある。問題点を挙げるなら、ヴィルヘルミーネとシエルがレーヴェのマシガントークについて行けずにいることと、台座（三沢）が肩を震わせていることだろうか。
「私を踏み台にするなーっ！」

三沢が落ち着くのを待つて、シエルとヴィルヘルミーネはレーヴェと千里に対して自己紹介を行った。

その間のマスター達はというと……。

「しつつかし、2体同時に起動とは、小松野もやるねえ」

「まあ、な」

「偶々手に入れたのでなければ、尊敬したんですけどねえ」

「三沢、お前は黙れ」

実際には手に入れたのが偶々なら、ヴィルヘルミーネが起動したのは想定外の出来事だった。

陸郎は、あの日の事を思い出す。

あの日、買い物を済ませて帰った陸郎を待っていたのは、陸郎が起動させたシエルと、シエルが起動したヴィルヘルミーネだった。

なんと、神姫は命名後に名前を呼ばれると起動する機能が付いている。これは通常、スリープモードからの復帰に使われる機能だが、初回起動時から機能しているのだ。

そして、名前決定の状態にして出掛けた陸郎。まぬけ

家に残されていたシエルは、目がさめて他の神姫の存在に気付き、話し掛けた。そして起動したのがヴィルヘルミーネである。
今回の教訓。説明書はちゃんと読みましょう。

頭上の神姫（後書き）

予想外に長くなってしまいましたので、一旦切ります。

これが、戦場……（前書き）

省略

これが、戦場……

「どうかしましたか、マスター？」

あの日の事を回想していた陸郎は、すぐ近くまで来ていたヴィルヘルミーネの声で我にかえった。

「いや、何でもないよ」

「そうですか。それなら良かったです」

そう言つてにつこり微笑むヴィルヘルミーネに、やっぱり起動して良かったと思う陸郎。

あの後、多少は動揺を見せた陸郎だが、それは起動させるのを楽しみにしていたのに勝手に起動していて驚いたからだと言ひ繕つて、シエルを少し叱つておいた。

本当は起動されず、状況によつてはそのまま死蔵されるかもしれない。なかつたとは、本人には言えない。

三井と三沢には言うつもりで来た陸郎だったが、やはり余計な事は言わず、この秘密は墓の中まで持つていこうと思ひ直すのだった。

「で。今日はやつてく？」

陸郎に対して銃を構える仕草をする三井。

「いや。軽酷的を撃つて、その後2人の武装を試そうかと思う」

陸郎はバッグからサブマシンガンを取り出す。

「マスター、この銃は？」

「ヤティマチック。コイツがマトモに作動するかどうかで、1日の気分が決まる」

ヤティマチックは電動＋ガス式という珍しい方式で、ハイブリッドだから最新かと思いきや、実は半世紀前のアンティークだったりする。

陸郎はヤティマチックのマガジンに単3電池をいれ、グリップの

ガス注入口にガスボンベを挿した。

「うーん。ちよつとガスを入れ過ぎたかもしれない」

「入れ過ぎると、良くないんですか？」

マガジンを本体に装着する陸郎の手元を、三沢が興味深そうに覗き込む。

「ん？ 三沢は知らなかったか。この銃、電池切れなら作動せず、ガス切れなら銃口から弾がポトポト落ちる。ガスを入れ過ぎると…

…」

「入れ過ぎると？」

「どうなるんですか？」

エアガンとはいえ、人間が銃器を撃つのを初めて見るシエルとヴィルヘルミーネも食い付いた。

三井と千里は、ガス切れも過充填も見ただ事があるので、苦笑いしながら離れた。

陸郎はヤティマチックの安全装置を兼ねるフォアグリップを展開し、標的のダンボールに狙いを定め、引き金を引く。

軽い破裂音と共に硝煙を思わせる生ガスが吹き出し、BB弾は15メートルの距離を1秒とかけず飛翔してダンボールを易々と貫通。後方の松の木にめり込んで碎けた。

「作動は良好みたいだな」

「あれだけガス圧高くなっても壊れないなんて、さすが……って違ーうッ！」

しばし果然としていた三沢が引き気味に言い、シエルとヴィルヘルミーネも目を白黒させている。

「マスター、今のはちよつと。さすがにあたし達でも引くよ」

「駄目です。あれは無理です。あんなの当たったりしたら、壊れてしまいます」

ヴィルヘルミーネはむしろ、トラウマになったのではないかというレベルだ。

ただ、ゼルノグライド型の2人は目を輝かせ小躍りし。三井はそ

れを眺めてケラケラ笑っていた。

2発目からは普通の威力で、ダンボールの片面すら貫けない威力だったが、初弾の衝撃が大き過ぎたのか、ヤティマチックを怯えた目で見るヴィルヘルミーネが可哀想なので陸郎は早々に射撃を切り上げた。

「では、コリドーの店主から頂いたモノを試そうか」

ヤティマチックをバッグにしまい、次は神姫用の武装を取り出す陸郎。

「マスター。その前に、その銃は破棄するべきです。破壊して捨てるべきです！」

ヴィルヘルミーネはビシッと叩きつけるような勢いでバッグを指差して言った。どうやら、ヤティマチックを敵と認識したようだ。

「却下。不許可。勿体無い」

陸郎は即座に拒否。

「そうそう。勿体無いよね、壊すくらいなら私に」

「あ、私も欲しい」

そう言って手を延ばすレーヴェと千里にデコピンをくらわせ、陸郎は白い武装セットと白に青紫の武装セットを取り出す。アーンヴアルMK?とエウ克蘭テの純正武装セットだ。

エウ克蘭テ型の武装セットには、手書きで【展示用】と、書かれている。

「シエルのは展示用か。これは一人て装備できるのか？」

「付け方はわかるけど、手伝ってほしいな」

リアユニットなど、補助が必要な部分を陸郎が手伝い装着していく。

「マスター、私もお願いできますか？」

「ああ」

ヴィルヘルミーネもリアユニットを取り付け、2人揃って装具を整える。

「ふむ。似合ってるな」

「本当ですか？ エヘヘ」

「そう言われると、嬉しい……かな？」

陸郎は照れる2人を微笑ましく思いながら、背後で『爆発しろ』と呟いた三井にアイアンクロウをかけつつ武器を取り出す。

「それにしても、シエルの装備は本当に鳥みたいだな」

「セイレーンは海に住む鳥の姿をした怪物だから、間違いじゃないわよ」

「ふーん。そうなのか」

水中戦が苦手で、楽器型武器の扱いも十人並み。それが陸郎の得たエウ克蘭テ型の評判だ。

（本人が鳥じゃなくてセイレーンだと言うなら、それでいいか）

ただの鳥じゃないかという言葉を飲み込んで、陸郎は武器を並べていく。

ヴィルヘルミーネにはランチャーとビット、それからバヨネット付きサブマシンガン。

シエルにはランチャーとナックル、ダブルナイフ。なぜかナックルとダブルナイフは2組み入っていた。

「ヴィルヘルミーネは射撃特化型だな。シエルの武器は何で余剰が？」

「ああ、それね。あたしの武器は、組み合わせる事で大型ショットガンになるから」

ナックル武装『ゼビュロス』、ダブルナイフ『エウロス』、ランチャー『ボレアス』の3つを手早く組み合わせ、ショットガン『テンペスト』を組み上げたシエルは、得意気に胸を反らせた。

「普通はランチャーの方がグレード高くないかなあ」

空気を読めない三沢は後で締めることにして、陸郎はテンペストを観察した。

「ショットガンか。ナックルにナイフということは、近接格闘だな」
なんだかますますセイレーンから離れていく気がする陸郎。

と、いうか、リアルファイトでも使える武装で、ランチャーから

ショットガンになるといっのはどんな機構なのだろうか。

「ま、いつか」

考えても答えは出そうにないので、陸郎は考えるのをやめた。

さて、一方のヴィルヘルミーネだが、白い。この一言に尽きる。

陸郎はようやく白子と呼ばれていた意味を理解した。

「ヴィルヘルミーネは白が似合うね。触っていい？」

「あ、はい」

了解を得てリアユニット、『ジンプタラス』に触る陸郎。

（子供の頃に見たF-15を思い出すなあ）

その思考を口に出さなかったのは、アーンヴァルは戦闘機ではなく天使型だからだった。

シエルとヴィルヘルミーネが一通り作動チェックを終えた頃。

「ねえねえ、せつかくだから模擬戦やらない？」

そう言ったのはレーヴェだったが、三沢と三井、千里も同じ意見らしく頷いていた。

「模擬戦ですか？」

「マスター、どうする？」

「ルールによるな。当然、ハンデはあるよな？」

陸郎は、初心者マスターの自分ではマトモに戦えないと思っていた。

「んじゃ、俺がルールを決めようか」

三井が名乗りを挙げる。

三井が提示したルールはこうだ。陸郎とシエル、ヴィルヘルミーネの3人チームと、三沢、レーヴェ、千里の3人チームで戦う。

三沢がレーヴェと千里に指示を出し、陸郎がシエルとヴィルヘルミーネに指示を出す。

敗北条件は、三沢チームは三沢がやられたら。陸郎チームは全滅するまで。

「これでどうだ。三沢は何か意見あるか？」

「問題ありません。三井さんは何をされるんですか？」

「おれはルール出したんだから、審判やるよ。陸郎は？」

「そうだな。人間は神姫を狙ってはいけないと追加してくれ」

「了解。じゃあ、お嬢さん方に対人兵器を渡さないとな」

三井は自分のカバンから武器を取り出して陸郎に渡した。

【6ミリBBキャノン】を手に入れた。

三沢チームは配置に付き、そのまま開始しようとする三井に陸郎は待ったをかける。

「純友、私の分の軽機は？」

ちなみに、軽機とは軽機関銃のことだ。

「陸郎には自前の銃あるだろ？」

「今日はヤティマチックとフリントロックしか持って来てない」

フリントロック——エアークッキング式の素敵アイテム。

「ハア、仕方ねえ。俺のスポチャン貸すよ」

「そこは銃を貸してくれよ」

三井から借りたスポチャン——スポーツチャンバラで使うスポンジ製竹刀——片手にフリントロックピストルを2丁、腰にぶっ差して陸郎の準備は終わる。

「さて。作戦会議といこうか」

時代錯誤な武装だが、陸郎の所作はやけに堂に入っていて、シエルとヴィルヘルミーネはツツコミを入れる機会を逸した。

模擬戦の場所は今居るゲームエリア入り口広場とその周囲の木立。遮蔽物は草のみ。シエルはここを前進。ヴィルヘルミーネはシエルを援護。私は木立の中を回り込む」

「私達も木立の中に入った方が良いのでは？」

ヴィルヘルミーネが手を挙げて質問する。

「ダメだ。それだと相手の神姫の動きも分からなくなる」

即座に答える陸郎。

「人間は神姫を狙えない以上、神姫には神姫を当てるしかない」

「つまり、あたしが中央を進めば、神姫を引きつけられてマスター

同士の1対1になるわけね」

「そうだ。ヴィルヘルミーネも分かったか？」

「はい！ わかりました。中央は任せてください」

広場の周りを囲む木立。広場を挟んで三沢チームとは反対側に入って開始を待つ。

中央に立つ三井が合図をして、模擬戦が始まった。

「たあー！」

シエルが叫びながら滑走して中央に行く。その後方、空中を警戒しながら進むヴィルヘルミーネが、反対側の木立から出て来た2体のゼルノグライド型を捉えた。

「シエルさん！ 敵が出てきました！」

「わかったわ！」

索敵能力の高さを活かして遠距離砲撃を行おうとするヴィルヘルミーネだが、敵もさるもの。ミサイルアラートが鳴り響き、ヴィルヘルミーネは慌てて草むらに飛び込んだ。

ヴィルヘルミーネに続いてミサイルの群れが草むらに突っ込む。

「きゃあ！ た、助かった？」

「ヴィルヘルミーネ、大丈夫！？」

自分のLPに変化が無い事を確認したヴィルヘルミーネに、引き返して来たシエルが呼びかける。

「シエルさん？ 大丈夫です！」

「無事で良かった、ヴィルヘルミーネ。あ、それと『さん』付けは知らないわ。あたしは呼び捨てにしてるし」

シエルはそう言って手を差し出す。

「わかりました……シエル」

差し出された手を取りながら、ヴィルヘルミーネは嬉しそうに笑う。

立ち上がったヴィルヘルミーネを見て、シエルは不敵な笑みを浮かべた。

「じゃあ、反撃しよつか。あたしが突っ込むから、ヴィルヘルミーネはランチャーとビットで援護して」

「大丈夫ですか？」

「大丈夫よ。テンペストはショットガンだから、当てるだけなら簡単よ」

そう言っただけで笑ったシエルはそのまま駆け出した。

「私も、頑張らないと……！」

ヴィルヘルミーネは再び、空に舞い上がった。

ヴィルヘルミーネがミサイルに追われて草むらに逃げ込んだ時、陸郎は気が気でなかった。

おそらく無事だろうという勘に任せて我ながら酷い作戦だと自嘲しながら作戦通り木立を進み、適当に三沢が潜んでいそうな茂みを撃つ。

反応は、シャワーのようなBB弾。とっさに盾にした松の木に、雨霰と降り注いだ。

「火力が違い過ぎる」

三沢のM16は狙撃仕様のフルオート。このままでは動けない。だが、シエルとヴィルヘルミーネも戦っている相手は格上だ。ここでマスターである陸郎だけが負ける訳にはいかなかった。

「官軍兵士VSゴルゴか。相手が本人なら完敗だったな」

陸郎はさっき撃った方のピストルをコッキングすると、銃口からBB弾を1つ流し込み、耳を澄ませる。

一際甲高い発射音の後に、射撃が止まる。陸郎はすかさず三沢の方に向けて引き金を引いた。

そのまま、自分の射弾を追い越す勢いで駆け出す陸郎。案の定、三沢はマガジンチェンジをしていた。

三沢みくは余裕を持って弾倉交換に励んでいた。さっきBB弾が2つ掠めて行った。向かって来る小松野の銃は弾が装填されていない、余裕で間に合う、と。

しかし、経験に基づく勘が警告を発する。あの人はたまに変態的行動をする、と。

本能的に回避行動をとった三沢は、射弾の回避に成功する。だが、交換途中のマガジンは吹っ飛び、伸ばした手がサイドアームに届く前に首に剣を突き付けられた。

「最後までやるか？」

「なはは、予想外過ぎますよ」

三沢は大人しく両手を上げた。

千里は草むらから飛び出して来たシエルに照準。リアユニットの1・2ミリ砲を撃とうとして、敵レーザー波を探知。瞬時に飛び退いた。

ヴィルヘルミーネの放ったレーザーランチャーの射撃が数センチ先を通り過ぎる。

相手は素人にしては連携が取れていることに舌打ちしたい思いにかられながら、レーヴェにヴィルヘルミーネへの牽制を強めるように言う千里。

彼女は慢心があったのかと思いつく。

相手はタッグどころか戦闘も素人^{ルキ}。こちらはタッグを組んで長い玄人^{プロ}。胸を貸すつもりだったが、たった数分の撃ち合いで、彼女達は千里達と互角の戦いをするようになった。

何度目かのシエルの突撃。だが、レーヴェの牽制が効いたのかヴィルヘルミーネからの援護は無く、シエルは千里に向けてテンペストを撃って離脱する。

千里はテンペストの散弾から逃げて横に逃げ、反撃に移ろうとした。

しかし

「いつの間にッ!？」

千里のすぐそばにヴィルヘルミーネの放ったビット【ココレット】が漂っていた。

二方向から鳴り響くロックオンアラートに今更気付いても遅い。
千里は弾幕に吞まれ、レーヴェもヴィルヘルミーネとシエルの挟撃に沈んだ。

「純友、なぜ終了させなかった」

模擬戦は三沢チームの全滅で幕を閉じた。三沢が陸郎に降った時点では、まだ神姫同士の戦闘は続いていて、ルール通りならばそこで終了しているはずだった。

その事について三井は――

「だって、三沢は降参しただけで、倒されてないだろ？ それに、この戦いを途中で止めるのも勿体なかったし」

「しかしな……」

陸郎が視線を向けた先。そこには膨れっ面の三沢チームがいた。

「ストレート負けなんて、なんという屈辱！」

「隊長！ こうなったら特訓あるのみであります！」

「ウムム、次は絶対負けないんだから！」

それに対する勝者、ヴィルヘルミーネとシエルの二人は――

「えへへー。マスター、やりました！ 初対戦、初勝利です！ 初陣を勝利で飾りました！」

「あたしとヴィルヘルミーネのコンビは最高だね」

と、非常にテンションが高くなっている。

陸郎も模擬戦の最後の方は2人の戦いを見ていて、その動きに驚き、一人乗り遅れた気分になっていた。

「あの、マスター」

「ん？」

再び胸ポケットに2人を収めようとした所で、ヴィルヘルミーネが陸郎を見上げながら尋ねる。

「マスター。私は、マスターの作戦通りに動けていましたか？」

「ああ。想像以上だったよ」

正直な話、千里とレーヴェの二人とも撃破できるとはおもわなか

ったのだ。

「うふふ。嬉しいですよ！ これからも、頑張りますね！」

「それじゃあマスター、あたしは？」

今度はシエルからの質問。

「私の理想を軽く越えてくれたよ。2人には、ただただ驚くばかりさ」

「本当？ フフツ。なんだか照れちゃうな」

「私達2人、マスターをもっと驚かせますね！」

喜ぶ2人を見てみると、陸郎もホンワカした気分になっていた。

「な。小松野も最後までやって良かったろ？」

「ああ。半端ならここまで嬉しいがらなかったかもな」

陸郎は三井にスポチャンプレードを返し

「あ、そうだ」

寸前で、スパンと小気味良い音を発して三沢の頭を叩いた。

「いったーい！ な、何するんですか」

「何だろ？ 理由は忘れたが、お前をシメようと思ってたんだよな」

「何ですかその理由はッ！」

勝者も敗者も無く、笑い声がフィールドに木霊した。

これが、戦場……（後書き）

構成が下手で、各話の文章量のバランスが悪いです。あと、感嘆符使い過ぎですかね。三点リーダーも使い過ぎてしまっています。ああ、もう。

補足

ヤティマチックのガス過充填：作者の体験を基にしている。作者は空撃^{から}ち状態でこの体験をした。

一際甲高い発射音：電動エアガンの弾切れ時の発射音。弾が切れても発射サイクルは行われ、空撃ち状態が起きて発生する。

銃口から弾を流し込む：本当はやっちゃダメ。でも、『ちょっとした散弾のつもり』でついやっちゃう。

2：君がマスターで神姫が私で（前書き）

休みも終わり、久しぶりに仕事に復帰する陸郎。

2：君がマスターで神姫が私で

小松野陸郎は早寝早起きだ。毎日22時を過ぎると布団に入り、朝5時に起きだす。

起きたらまず、顔を洗い、ジャージに着替えると外に出て、日課となっている腹筋50回、ジョギング5キロ、懸垂10回をこなす。朝食はトーストにスープで済ませる事が多い。いや、過去の話だから多かった、か。

彼曰わく『一人では何を食べても【美味しい】【不味い】くらいしか感じない。ならば、手間をかけるだけ無駄』であり、『誰かと一緒に食べて初めて、何がどう美味しいのか、という話ができる』らしい。

彼の生活は神姫が来てから変わり始めた。

具体例を上げるなら、最近の彼は寝る前に炊飯器をセットし、朝は味噌汁を作り、懸垂を15回に増やしてみたり、腕立て伏せを追加しようかと考えてみたり。

もともと、今日に限っては以前のようにパン食に戻っている。

「今日から仕事に復帰する。帰りは午後6時ぐらいになるから、それまで適当に過ごしてくれ」

「うん、わかった。留守は任せてね、マスター」

「マスターが帰ってくるまでは、自由時間ですか。いったい何をしましょうか？」

初めてのお留守番に張り切る2人に後を任せ、陸郎は家を出る。

自転車を漕いで向かう先は、職場である喫茶店『花冠』はなかんむり。小松野陸郎、5日振りの出勤である。

「おはようございます」

カランカランとベルを鳴らして扉を開けば、落ち着いた雰囲気

店内。

メニューには和食も並び、座敷まである。元々は日本料理屋だったらしい。

「チーフ、おはようございます」

店内の清掃をしていたシヨートカットの女の子が挨拶をする。

松島郁美。まつしみいくみ接客担当のアルバイトで、近くの高校に通う高校1年生。神姫のオーナーでもある。

「土曜日の朝早くからご苦勞様」

「いえいえ。中学生の時ならこの時間は走ってましたから」

松島は中学時代は陸上部で短距離走の選手だったという。

陸郎が松島と挨拶を交わしていると、店の奥から痩身の中年男性が現れた。

「よう、小松野。また今日から頼むぞ」

花冠のオーナー、浜松一句。はままついっく自身も調理と接客を行う48歳。客商売なのに愛想は良くない事で知られている。

この他にアルバイトが2人いるが、その話はまたいつか。

「おはようございます、オーナー。私が休んでいる間に何か変わったことはありませんか？」

「バイト希望者が来たが、手は足りてるから断った。お前が居なければ面接も出来んしな」

「……そうですか」

またかと思い溜め息をつく陸郎。

このオーナーは人間が苦手で、面接などは全て陸郎任せ。今雇っているバイトは全員、陸郎が面接をした。

ちなみに陸郎自身はオーナーの弟のヒキで雇われた。

「んで、小松野よ。休みは楽しめたかね？」

「はい。当初の予定とは違いますけど」

陸郎は休みの間に神姫を買った事を話した。

「へえー。遂にチーフも神姫を買ったんですねえ」

以前から神姫を持っている松島が驚いたような声を上げる。

「チーフ、今度ゲームセンターに行きませんか？」

「そういえば、松島さんも神姫のオーナーだったっけ？」

「はい！」

松島は大きく頷く。

「私の神姫はアーンヴァルなんで、もう3年も一緒なんです」

「それは長いね。じゃあ、バトルの方も？」

「いえ。私はずっと部活やってたんで、バトルはからっきしなんです」

そう言っしてしゅんとする松島。アーンヴァル型に代表される武装神姫は本能的にバトルを求める。その求めに応えられなかった事を反省しているのだろう。

そんな松島を気遣ってか、浜松が疑問の声を上げる。

「しかし、店にもたまに連れてくる客がいるが、あんなちっこいのが役に立つのか？」

少しだけ変わった話題に安堵して、陸郎はチラリと松島を見た。この質問は、神姫と付き合いの長い松島に対するものだろうから。

松島は少し考えたが、たいして間を開けず答えを出す。

「それは、役に立ちますよ。ウチではご飯の準備とか、手伝ってくれますし」

「ふむ。そうか。役立つならウチの店でも買おうかな」

なぜか、浜松まで神姫購入に前向きなようだ。

「そうすりゃ、バイトを減らせるしな。うん、そうしよう」

「ちよつと、オーナー！」

これは良い考えだと手を打つ浜松に、慌てた松島が神姫には人間と同じ仕事は無理だと説明しているのを聞きながら、陸郎はゲームセンターでのバトルもやっておくべきかと考え始めていた。

2：君がマスターで神姫が私で（後書き）

次回予定

ゲームセンターで陸郎は初のマトモな神姫バトルを行う。

次回【狩りの時】

Double Take (前書き)

——ゲームセンター、そういうモノもあるのか——

陸郎はバトルをするためにゲームセンターを訪れた。

今回、バトルマスタースに（2011年11月現在の時点で）登場していない神姫が登場します。

Double Take

神姫バトルは大きく分けると2つに分類される。リアルファイトと、バーチャルバトル。

リアルファイトはその名の通り、神姫が実際にぶつかり合う方式で、陸郎達が前回行ったサバイバルゲームに神姫が混じるのも、これにあたる。

リアルファイトの難点は、広いスペースが必要になる事と、バトルによる神姫の損傷がある。また、戦闘の舞台によっては、メンテナンスの手間がかかる。

そのため、ライトユーザーがバーチャルバトルに流れるのも、当然の流れであった。

荒れ果てた廃墟の立ち並ぶ中、白い影が縫うように飛行する。

その白い影は何かを見つけて急停止した。

「発見しました。目標は逐次前進中。目標aは右40度、700。目標b、右60度の900」

「わかった。シエル、目標aの左に回り込んで叩くぞ。ヴィルヘルミーネは目標b正面に移動、射程内に入ったら撃て」

「うん。わかった」

「わかりました！ 右翼は任せて下さい！」

陸郎の指示を受け、移動を開始するシエルとヴィルヘルミーネ。

シエルは、どこか投げやりに思えるヴィルヘルミーネの直線的軌道を見送ってから、地表を這うようにダッシュ移動をする。

「マスター、ヴィルヘルミーネは拗ねちゃったみたいだよ」

「そのようだね。後で機嫌を取らないとな」

軽口を叩いて余裕を見せるシエルと陸郎。今、シエルとヴィルヘルミーネはバーチャルバトルの最中で、陸郎はシエルの視点でバト

ルを見て、指示を出している。

これはいわゆる【神姫ビューモード】で、最新の神姫ライドシステムはまだ、この田舎町には数台しか導入されていない。

「見つけた！」

相手は天使コマンドタイプ、ウェルクストラが2体。シエルが近い方の1体をロックオンすると同時に、もう1体に対してヴィルヘルミーネが攻撃を開始した。

「絶好のタイミングだ。シエル、行け！」

「了解。さあ、全力で行くよ！」

シエルは跳び上がると、そのまま空中を走り抜ける。

シエルが捕捉したウェルクストラはPDW機関銃で迎撃してくるが、射線は全て後方へ逸れ、瞬く間に距離がゼロになる。

勢いの乗った拳が頭上から振り下ろされ、ウェルクストラはどうにかシールドで受ける。

もう1体に応援を求めるウェルクストラだが、そちらもヴィルヘルミーネと交戦中で余裕は無く、合流するために距離を開けようとした途端、シエルのボレアスランチャーの射撃をモロに受けてしまった。

シエルはランチャーで吹き飛ばしたウェルクストラが立ち上がる前に、もう1体のウェルクストラに対して、ヴィルヘルミーネと挟み撃ちになるように発射する。

相手はヴィルヘルミーネの攻撃をシールドで防御していたが、背後まではガードされておらず、呆気なく弾き飛ばされた。先にダウンしていたウェルクストラが立ち上がった時には、シエルとヴィルヘルミーネが照準を定めていた。先程のシエルの攻撃で消耗していた彼女にはもう、武器を置く事しかできなかった。

「マスター！ 次は私の方を見て下さい！」

バトル終了後、ヴィルヘルミーネはいつになく強い口調で陸郎に迫った。不機嫌を通り越して怒ってすらいる。

ヴィルヘルミーネの怒った理由は明らかだった。今のバトルでもう5回もトレーニングをこなした事になるが、そのうち4回はシエルの方を見ていた上、明らかにシエルへの指示量とヴィルヘルミーネへのソレに差があったからだ。

陸郎の考えとしては、遠距離からの砲撃を指示していて、そのタイミングも突入したシエルとの連携も文句の無い内容だったので余計な口出しをしなかったのだが。

「2人の仕事は完璧だから、比較して危険の多い接近戦タイプのシエルについてやりたいんだが？」

「でも……っ！」

陸郎の言う事は最もであり、ヴィルヘルミーネはそれに何も言えなくなってしまう。そんな彼女に助け舟を出すのが、同じ神姫であるシエルだ。

「マスター。あたしは少し休みたいから、ヴィルヘルミーネとやっててくれないかな？」

「そうなのか？　なら、ウェルクストラを1体返して来るか」

ゲームセンターから借りている2体のうち、1体を返却して、再びゲームを開始しようとする陸郎。

ヴィルヘルミーネをゲーム機本体に接続したところで、シエルが話しかけた。

「ねえ、マスター。マスターは神姫が女の子だってわかってる？」

「ああ。知ってるさ」

シエルは陸郎の答えを聞いて、更に続けた。

「知ってる事と理解している事とは違うんだからね。神姫はいつだって、本当は、マスターには自分を見ていて欲しいんだから」

「覚えておくよ」

その後、ヴィルヘルミーネが満足するまでトレーニングを続けた陸郎。

アーンヴァル特有の高速機動に酔ってしまい、気分が悪くなって

しまった陸郎と、自信のあったタッグバトルでコテンパンにのされたゲームセンターのウェルクストラと、果たしてどちらがより不運だっただろうか。

「マスター。あたし、要らない神姫こじゃないよね？ 長いこと放っておかれると、不安になるよ」

「自分でけしかけておいて、何を言う」

休憩用の椅子に座ってグツタリする陸郎。隣に座るシエルは、ヴィルヘルミーネと一緒に戦っている間放置されていたからか、不満そうだ。

「いやしかし、シエルが我慢してくれたお陰で、ヴィルヘルミーネの機嫌は良くなったみたいだな。ありがとう」

「まあ、ね。あたしはヴィルヘルミーネよりお姉さんだし」

そう言つて、陸郎の飲み物マスターを買いにフードコーナーに向かうヴィルヘルミーネを視線で追うシエル。
ヴィルヘルミーネはカウンターで飲み物の入った紙コップを受け取り、ヨロヨロ歩いている。

ベンチから立ち上がり、そちらに向かおうとする陸郎の肩にシエルが飛び乗り、顔を寄せて言った。

「でもね、一番我慢しないといけないのは、マスターなんだからね。あたし達は…マスターのモノだけど、それはマスターがあたし達のモノだつていう事でもあるんだから」

「わかった。肝に銘じるよ」

陸郎はかがみ込んでコップを受け取ると、ヴィルヘルミーネの頭を撫でてやった。ヴィルヘルミーネは、幸せそうな笑みを浮かべるのだった。

「チーフ、来てたんですね」

後ろからかけられた声に陸郎が振り返ると、そこには松島郁美が肩にアーンヴァル型の神姫を乗せて立っていた。

「やあ、松島さん。神姫バトルをしにきたの？」

「はい。チーフですよ」

そう言っただけ松島は陸郎の肩に乗るシエルを見て、次に視線を下げてヴィルヘルミーネを見た。

「あれ？ そちらはどなたの？」

どうやら、松島はシエルは陸郎の神姫だが、ヴィルヘルミーネは他の誰かの神姫だと思ったみたいだ。

「シエルと、ヴィルヘルミーネだ。2人とも私の神姫だよ」

「え！？ 2体も買ったんですか！」

「ああ、そうだ。シエル、ヴィルヘルミーネ、こちらは松島郁美さん。同じ職場で働いている」

「初めまして、シエルです。よろしくお願いします」

「私はヴィルヘルミーネです。よろしくお願いします」

2人が挨拶をして頭を下げるのを見て、松島も頭を下げた。

「初めまして、松島郁美です。こっちはアーンヴァル型のアナスタシア」

「初めまして、アナスタシアと申します。あなたが小松野様ですね。私のマスターがいつもお世話になっております」

「いや、こちらこそ。松島さんにはいつも助けられている」

アナスタシアの挨拶に、陸郎は慌てて返礼をした。何せアナスタシアの所作は、ヴィルヘルミーネやシエルが思わず見とれてしまうほど見事だったのだから。

「ヴィルヘルミーネさん、シエルさんもこれからよろしくお願いします」

「はっ、はい。よろしくお願いします」

「こ、こちらこそ……」

ヴィルヘルミーネとシエルの慌て様は見えて面白い程だった。

「さて、顔合わせも終わった事ですし、やりますか」

そう言っただけニコリ笑う松島に、陸郎はゆっくり頷いた。

初の対人戦という事で、どうせならライドシステムという物を体験してみようという話になり、列に並んで順番を待つ。

「折角だし、天使タイプ対決といこうか。ヴィルヘルミーネ」

「はい！」

自分達の順番が来て、陸郎はヴィルヘルミーネをライドシステムの端末に接続する。

「マスター、あたしは？」

シエルがジト目で陸郎を見る。

「シエルは待っててくれ。今日は帰りにカラオケに行こう」

「うん。それなら大人しく待ってるね」

シエルを大人しくさせて、陸郎は頭と手足に電極を着ける。

ライドシステムは、脳波と手足の神経信号を読み取り、またそれらに介入するシステムで、この電極からその作業を行う。

「マスター。相手は直線加速力と最大速度で私（アインヴァル）
？）を上回っています。強敵です」

少し表情を強ばらせ、ヴィルヘルミーネが言う。

「スピード勝負は不利です」

「スペック上は、ね。戦い様はあるさ」

陸郎はヴィルヘルミーネの不安を拭うように軽く言うと、システム音声に導かれるままにゲームを開始する。

—— R I D E O N ——

陸郎の意識は、ぷつりと途絶えた。

Double Take (後書き)

次回予告

初のバーチャルリアリティ、初のライドオンに戸惑う陸郎。そして、新たな敵が……。

次回「Cocked Pistol」

C o c k e d P i s t o l (前書き)

ゲームセンターにて。陸郎は初めてのライドを体験する。

C o c k e d P i s t o l

全身を包み込む違和感に、陸郎は目を開けた。

久しぶりに広い視界の中、景色は先ほどとは一変し、目の前には川が流れていた。

背後には木々が生い茂り、左側は砂防ダムのようになっていて、水は左手のダムから流れ落ち、右手へと流れて行く。その先もまた、ダムになっているのか、水が流れ落ちていく。

「これは――」

凄いと云おうとした陸郎は、自分の声に驚いた。

どう聞いても女声である。驚いて口に当てた手も、ほっそりしていて華奢だ。

（マスター、聞こえますか？）

「ヴイルヘルミーネ、か？」

どこからともなく話し掛けてきたヴイルヘルミーネの声に陸郎は、そう言えば彼女は今どこにいるのかと辺りを見回す。

（マスター、今の私はマスターの中にいます。正確には、マスターが私の中にいるんですが）

「そうか、これがライドシステムか」

陸郎はライドシステムに対して、せいぜいリアルなFPS程度だろうと思っていた。だが、実際には予想を遥かに越えていた。

「凄すぎて、違和感が凄い」

（マスターは男の人ですからね。それにしても）

急に左手が上がり、左目の前あたりにかざされる。どうやら、ヴイルヘルミーネが動かしたようだ。

（マスター。左目が見えてなかったんですね）

「ああ。シエルには言っただよ？ 身体はそちらからも動かせるんだな」

（ライドレシオが低い状態なら、なんとか動かせます。あと、目の事はシエルにも言いますよ？）

どうせライドオンすれば分かる事なんだから、隠さなくていいじゃないですか。そう言うヴィルヘルミーネに陸郎は『では、ライドオンする度にリセットするしかないのか』などと考えた。

（あの、マスター。ライドオン中は考えただけでも伝わるんですけど）

「そうか。それは知らなかった」

リセットは冗談だが、弱味はなるべく知られない方が良い。人前で絶対に言わないようにヴィルヘルミーネに言って、陸郎は身体の具合を確かめる。

それでも陸郎は結構鍛えている方だ。華奢なヴィルヘルミーネとは重心などがかなり違っている。

「今回はこちらも相手も空中戦主体だし、身体バランスはそこまで気にしなくていいか」

（私もサポートしますし、頑張りましょうね、マスター）

「ああ。頼りにしてるよ」

ようやく準備が整ったらしいアナスタシヤが現れるのを見ながら、陸郎はそう言った。

武装エディットを行ってきたらしい松島／アナスタシヤの装備は、ランチャーにビット、そしてミサイルという遠距離特化型だった。

一方のヴィルヘルミーネの装備はランチャーとビット、シエルから借りたダブルナイフである。

お互いに、近距離戦の華である大剣を外しているのを見て、陸郎は苦笑いする。

ヴィルヘルミーネが昂ぶったのか、手足が自然に震える。

「ヴィルヘルミーネ、落ち着け。まずは深呼吸だ」

（今はマスターが主導権を握ってますから、私には出来ませんよお）
「それもそうか」

ヴィルヘルミーネ

陸郎は大きく2回深呼吸をして敵を睨みつけた。

アナスタシヤ

「さて、始めようか」

（はい！）

バトル開始の合図とほぼ同時に、両者は空中に舞い上がった。

「さすがに経験の差が有るか」

高速で飛行しながら陸郎は舌を巻いた。開始直後からどこかぎこちない拳動を見せるヴィルヘルミーネとは違って、アナスタシヤの動きは自然だった。

ヴィルヘルミーネ

神姫との性別の違い。そして、松島との間にあるマスターとしての経験の差。これらは陸郎にとっては不利な材料だった。

「でも、負ける気はしないな」

（マスター。頼もしいですけど、根拠が不明だと不安になってしまいます）

「根拠？ 戦場勘で十分だ」

互いに、埒が開かないと判断したのか、旋回を止めて向かい合うヴィルヘルミーネとアナスタシヤ。

睨み合ったのは一瞬で、次の瞬間には互いに突進していた。

インレンジ

（敵機、射程内！）

あつという間にロックオン範囲に入り、ヴィルヘルミーネが目標を捉えた事を報告する。が、まだ撃たない。

ランチャーもビットも発射までのタイムラグが大きく、発射後の隙も大きい。撃つても避けられ、反撃を受けるのは必至だ。

と、その時、アナスタシヤの姿が陸郎の視界から掻き消えた。

（レールアクション！）

ヴィルヘルミーネが叫び、咄嗟に岩陰に降下する陸郎。その岩の反対側に、ミサイルが着弾していく。陸郎はこの時、相手を完全に見失っており、岩を盾にできたのは全くの偶然だった。

（マスター、相手は右側に移動しています）

「分かった。反撃だ」

アナスタシヤがもう一度ミサイルを撃とうとしているところを捕捉、ビットを放つ。

岩の縁からビットを飛ばしたので、アナスタシヤが撃ったミサイルの爆風がヴィルヘルミーネの身体を襲う。

「わアア！」

（きゃあ！）

吹き飛ばされ、水面に叩きつけられる寸前に、ヴィルヘルミーネが制御して体制を立て直した。

（マスター！ 大丈夫ですか！）

「た、助かったけど、酔いそう」

フラつきながらも敵の確認をした陸郎は、ビットがアナスタシヤにかなりのダメージを与えた事を知る。

「よし！」

再び空中に舞い上がり、砲戦を挑む陸郎。だが、松島も学習したのか、遮蔽物を使い、射撃のタイミングを図るようになったため、有効打を叩き込む事が出来ずに時間が過ぎて行った。

「マスター、勝ちましたね」

「ああ。次も頼むぞ」

「はい！……でも、判定での勝利は少し悔しいです」

陸郎とヴィルヘルミーネは勝利した。ただし、時間切れの判定勝ちで。

「私では、アナスタシヤさんを討ち取れませんでした」

「いや。私の技量不足が問題なんだ」

対戦を振り返ると、陸郎がヴィルヘルミーネの性能を活かしきれていない事が良く分かる。

「経験が足りない」

反省事項は、その一点に集約されるのだった。

「それではチーフ、また明日」

「ああ。また明日」

昼食時になり、家で親が待っているという松島は帰っていく。その肩から、アナスタシヤがヴィルヘルミーネ達に声をかけた。

「ヴィルヘルミーネさん、シエルさんも、今日はありがとうございました」

「いえ。私も楽しかったですから」

「今度はあたしとバトルしましょうね」

3人は手を振り合って別れた。

陸郎が食事でもして帰ろうかと思っていると、シエルが話し掛けてきた。

「ねえ、マスター。お昼時で人も少なくなっただし、あたしもバトルしたいんだけど」

シエルの言うとおり、周りは大分空いており、ライドシステムもすぐに使えそうだ。

「そうだな……」

本当は『腹が減ったから帰る』と、言いたい陸郎だが、さっきシエルから『マスターが一番我慢しないといけない』と言われたばかりなので我慢する。

空いている台に付いてすぐ、対戦相手が現れた。

相手の見た目は中学生くらいの中々ハンサムな少年で、連れているのは確か、ムルメルティアというタイプだ。

「なんだよ、おっさんが相手かよ。マトモにバトル出来んのか？」

「閣下、少しはオブラートに包むべきでは？」

礼儀知らずだなというのが陸郎からの第一印象だった。

「しかも、どノーマルのエウ克蘭テかよ？　はあ、ダセエ」

「閣下！」

陸郎の頭に血が登り始めた。ムルメルティア型神姫に閣下と呼ばれている少年はそれを見てニヤリと笑う。

これは作戦なんだと、冷静さを失うなと自分に言い聞かせ、陸郎

はシエルをセツトアップする。

「シエル、完膚無きまでに叩き潰すぞ」

「うん。そうだね、マスター」

C o c k e d P i s t o l (後書き)

いけない少年を教育してやる事にした陸郎。

次回「Fire Storm」

Fire Storm (前書き)

腹立たしい少年を躰てやろうとする陸郎。

Fire Storm

2回目という事もあるが、怒りのエネルギーとは凄まじいもので、陸郎はシエルの高機動にも振り回されず戦っていた。

陸郎の沸点の高い方だが、身内を貶された場合はナフサ並みになっってしまうのだ。

「えやあつ！」

「くっ！」

陸郎の操るシエルがムルメルティアの砲撃をかくぐり、殴りつける。

時にガードされるが、良い当たりが何発か入る。

「コイツ！」

距離をとって砲撃するムルメルティアだが、シエルはそれをジャンプしてかわし、次弾は急旋回で避けた。

「なんで当たらない！」

ムルメルティアが叫びながら放った3射目は、急に動きを止めたシエルの頭上を通り過ぎ、シエルは何事も無かったかのように着地した。

「あなたにだけは、負けたくない！」

それはシエルと陸郎、どちらの叫びだったのか。

「ヤアアアッ！」

雄叫びを上げながらシエルはムルメルティアに向け突進する。

「く、来るなあアッ！」

ムルメルティアは弾切れの砲を棄て、機関銃で迎え撃つ。

視界を埋め尽くす弾丸の中、それでも陸郎とシエルは止まらない。

（シエル、頼む、耐えてくれ！）

（マスター、分かったよ！）

光がシエルの身体を包み込んで、銃弾をものともせずに進んで行く。

射撃は確かに当たっているのに、拳を振り上げながら迫るシエルの姿に、ムルメルティアと少年は恐怖心を抱き、ライドレシオが低下した。

「閣下！ 後退を！」

「でやあアッ！」

気合いと体重の乗った一撃を、シエルが放つ。一発、二発、殴って殴って蹴り飛ばして。

ムルメルティアは立ち上がらなかった。

「フフン。これが今のあたしの実力だね」

「次も勝とうな」

さて、と一呼吸置いて、陸郎は対戦相手の方に近付いた。そこには、暴言を吐く少年と、それを宥めるムルメルティアがいた。

「納得いかねーよ！ どうして俺がオッサンに負けてるんだ！」

「現実を受け入れなくてはならない。それが指揮官というものだ、閣下」

あまり近付きたくない陸郎だが、マナーとして挨拶はしなくてはならない。

「まあ、私は大人だから、礼儀も戦い方も知らない子供にも、優しくしないと」「マスター。口に出してるよ」

「聞こえてるぞ、オッサン！」

少年は怒りながら陸郎に詰め寄った。

「納得いかねー！ もう一回だ！」

「やだよ面倒臭い。腹も減ったし」

にべもなく断り、陸郎は帰ろうとする。

「ざけんな！ この俺が納得してないんだ！ もう一回やれ！」

「何を言ってるんだか」

陸郎は呆れ果て、溜め息をついた。

「私、勝者。君、敗者。立場が上なのは私だろ？」

「そこを何とかお願いできないだろうか？」

陸郎と相手マスターの間にムルメルティアが割り込んだ。

彼女は、頭を90度まで下げて頼み込んだ。

「……しょうがないな。シエル、やれるか？」

「当然。まだまだやれるよ」

「じゃ、やるか」

陸郎は本当に渋々といった感じで台に戻った。

「ありがとうございます！」

「ふん。最初から素直に再戦しとけば良いんだ」

「閣下！」

少年が何か言っていたが、陸郎は無視して開始した。

結論から言ってしまうと、陸郎とシエルの圧勝だった。

相手も今回は色々と仕掛けてきたが、シエルは一撃も食らわず勝つて見せた。

「なんでだー！」

「閣下、落ち着いて！」

錯乱した少年は、捨て台詞を吐いて走り去ってしまった。

「やれやれだ」

陸郎は空きつ腹を抱えながらベンチに座る。

「マスター。お疲れ様」

「かつこよかったです」

シエルとヴィルヘルミーネが声をかけた。

「2人もお疲れ様。今日はそろそろ帰ろうか」

空腹もそろそろ限界にきていた。

「あの、ちよつといいですか？」

立ち上がって、さて帰ろうかなと思った陸郎に、一人の青年が声をかけてきた。

「先程のバトルは見事でした。さしずめ虎殺しといったところでし

ようか」

「失礼、貴方は？」

陸郎は、ヴィルヘルミーネとシエルを背中側に隠しながらその青年を観察する。

既製品のスーツを着て見た目は二十歳代前半。つまり、陸郎と同じ年代に見える青年は、人の良さそうな笑顔を浮かべた。

「失礼。私はこういう者です。」

青年に名刺を差し出され、陸郎は受け取った。

「Kamoi Corporation 渉外室長、きかい・じやうぶつ岐阜重蔵。変わった役職ですね」

「ははは。よく言われます。渉外室はまあ、営業部ですね」

岐阜の笑い方は爽やかだがどこか空虚で、ワザと笑う事に慣れている感じがした。

それは社会人ならごく普通の事なので、陸郎は気にせず話を続けた。

「お若いのに部長クラスとは、スゴいですね。それで私に何の用でしょう？」

笑い方は気にはしないが、日曜日のゲームセンターで声を掛けてくる相手にしては、肩書きが異常である。陸郎は警戒を怠らない。

「先程の戦いに感服しました。今後、我が社の製品を御贖戻にしていたければ、と」

そう言つて、カタログを陸郎に手渡す岐阜重蔵。

「カタログの最後のページに、小社のシヨップ地図があります。どうか、ご利用下さい」

一方的に言い終えると、陸郎の返事も聞かず去って行く岐阜。陸郎は暫くそのまま佇んでいたが、やがて動き始めた。

「ただの営業マンにしては、嫌な感じの奴だった」

「マスター、このまま帰るの？」

陸郎の肩に乗ったシエルが尋ねる。

「……たしか、ココの2階がカラオケ店になってたな」

「そうそう。ちゃんと覚えてたね。偉い偉い」

「私、カラオケって始めてです」

楽しそうに話す2人を見て、ギリギリでも思い出せて良かったと思う陸郎だった。

1時間ほどカラオケを楽しんだ陸郎達は、再び対戦台の前にやって来た。

「いやー、よく歌ったな」

「マスターは食べてばかりで歌ってないでしょうが」

カラオケ店で空腹を満たす事に専念した陸郎に、シエルから鋭いツツコミが入る。

「でも、いい食べっぷりでしたね」

「まあ、可憐な歌姫が2人もいるんだ。わざわざ下手な歌を披露しなくてもいいだろ」

「そんな、歌姫だなんて……」

「そんな、可憐だなんて……」

照れるて赤くなるシエルとヴィルヘルミーネ。違う部分に似たような反応をする2人に和みながら、陸郎は対戦台を眺めた。

「マスター。対戦はしないんですか？」

「ああ。他の人達がどう戦うのか見たくてね」

出来ればアーンヴァルの上手な使い方を見たい陸郎だが、パツと見て白い機体はいない事が分かった。

2つある対戦台のうち、手前側の台はハウリン型とマオチャオ型の戦いで、奥にある台はどうやらタッグ戦みたいだが、ムルメルティア型とハウリン型のタッグと、ゼルノグライド型2体のタッグが戦っている。

「あれ？ マスター。あそこで戦っているの、千里さんとレーヴェさんじゃありませんか？」

ヴィルヘルミーネに言われてみれば、確かに千里とレーヴェだ。しかも、劣勢である。

「しかも、あの相手って……」

シエルが戦っているムルメルティア型を指差す。装備から判断すると、さっきバトルした相手のようだ。

千里とレーヴェの装備はそれぞれ、千里が1・2ミリ滑腔砲（バズーカ扱い）・多弾頭ミサイル・ダブルナイフで、レーヴェがパイランカー・ガトリングガン・機関銃と、遠く中距離と近く中距離で分けて対応し、互いの連携も悪くない。

それでも苦戦中なのは、相手の方が格上なためだろう。

より正確に言うなら、ハウリン型が、となるが。

力任せに押し込むムルメルティア型を、ハウリン型はうまくサポートして戦っている。

陸郎が戦いを観察しているうちに、千里がムルメルティア型に叩き臥せられ、レーヴェもほどなく沈黙してしまった。

「ううむ、負けてしまったか。おや、陸郎じゃないか」

「純友。手強かったか？」

陸郎が尋ねると、三井は大袈裟に肩をすくめて見せた。

「これで2戦2敗だよ。単体ならどうともなるんだがね」

「ですが、マスター。兵の基本は集団戦です。タッグでの敗北はシヨックです」

神姫も出て来たようで、千里が話に加わった。

そして、神姫が対戦台から上がって来ているという事は、相手もおそらく離れていて……。

「見つけたぞ！ オッサン！」

先程の少年が、陸郎を睨み付けていた。

「やあ、少年。また会ったな」

心の底から嫌そうに言う陸郎だが、テンションMAXらしい少年は気にも留めない。

「俺は阿波戸日向あわど ひゅうが！ そして俺の神姫、ムルメルティア型のナーゲル！ お前に再戦を申し込む！」

ビシイっ、と『格好いいポーズ』を決める少年改め阿波戸日向。

その隣に日向より少し年上っぽい女の子が並ぶ。

「私は日向の姉の柚子ゆずといいます。弟が失礼な事を言ったようで、すみません」

「いえ、もう気にしてませんから」

頭をさげる柚子に構わないと返す陸郎。

陸郎もシエルも、言われた時は頭にきたが、バトルでやり返して気が晴れている。

むしろ、柚子の丁寧だが敬意の欠片も見えない態度が不快感を煽る。

「気にしてないと言われるなら、バトルの話しは受けて貰えますね？」

「姉貴が居れば百人力だ！ お前を奈落に叩き落としてやるぜ！」

「ハア……」

どこからともなく聞こえた溜め息。その主を陸郎が探せば、疲れた顔をしたハウリン型とムルメルティア型——ナーゲル——と目が合った。

（君達も大変だな）

（いいえ。私は閣下が好きですから）

そんな感じのアイコンタクトをとる陸郎。

「マスター。なに他人の神姫と分かり合っちゃってるのかな？」

背中に抓つかられるような痛みが2つ……2つ？

陸郎が背後を窺うと、怒り顔のシエルだけでなく、涙目になったヴィルヘルミーネまで背中を抓つかっていた。

「言い忘れました。私の神姫はハウリン型のレティシアです。それでは、良い戦いを期待します」

そう言っただ対戦台に歩いて行く柚子。その後を追う神姫2体と日向。

「まだ、受けて立つって言ってない……」

「あの姉弟はいつもそうさ。他人の話を聞かない」

陸郎の肩を叩いて励ます三井。

「そういえば、三沢は？」

「三沢隊長でしたら、あつちでヤケコーラ飲んでます」

千里が指差す先には、コーラ一氣に興じる三沢と、ニトロチェリ一氣に興じるレーヴェがいた。

「陸郎。三沢はそつとしておこうぜ。それで、お前の事だから何かわるだくみ策略があるんだろ？」

「作戦、な。あと、タッグパートナーなら声くらい掛けてやれ」

うへえ、と嫌そうに呻く三井。

「私のマスターが三沢隊長の方へ行くとすると、2対1のハンデ戦ですか？」

千里の疑問には首を横に振って答える陸郎。

「ライドシステムはオフ状態でも戦えるらしい。シエル、ヴィルヘルミーネ、出るぞ」

背中に貼り付いていた2人を剥がし、その頭に手を置く陸郎。

「戦闘要領を伝達する。タッグをさせるな。1対1を同時にやれ」

対戦を中継するモニターには激しい砲撃戦が映されていた。

初めは、三井と三沢が遠巻きに見ているだけだったが、やがて2人はモニターに近付き、その後ろにも立ち止まって見入る者が出始めた。

阿波戸姉弟はタッグとしては上位に入る。個人としての技能は中堅クラスでしかない2人だが、姉の柚子がサポートに徹する事と、ナーゲルとレティシアを一体として戦う事で、技量の差を覆していた。

2体で1体を相手にする。ナーゲルは攻撃力で、レティシアは対応力。このやり方はうまくいっていた。少なくとも被害を受けたとしても、単体では互角以上の腕を持つ相手達を屠ほぶってきたのだ。

そう、今までは……。

先ず、レティシアがヴィルヘルミーネのビットに捕まり、そこにランチャーを撃ち込まれて沈黙した。

日向とナーゲルは焦りながら目の前を悠々と飛ぶシエルに照準を合わせる。

優雅さすら感じさせる飛翔。そして、交差する砲撃。

互いに避けて、再びの対峙。

陸郎が取った策は、遠距離砲戦で各個に戦う、というタッグのセオリーを無視したものだった。

確かに、タッグパートナーを無視して、あたかもシングルマッチが2つ同時に行われているようなバトルもたまに見られる。

しかし、それは相手も1対1に乗ってきた場合であり、阿波戸姉弟のように2対1を基本とする場合には通用しない。

そこで遠距離砲戦という選択が出てくる。

シエルがナーゲルと撃ち合い、支援しようとするレティシアとの間には、ヴィルヘルミーネが立ち塞がる。

今回はヴィルヘルミーネの立ち回りが作戦の要となるので、陸郎はヴィルヘルミーネにライドオンしていた。

そして、撃ち合いで敵の隙を突く事に於いて、陸郎は柚子よりも長じていた。

開始から1分でレティシアは被弾し、その僅か30秒後には撃破されてしまった。

ナーゲルは敗北を確信しながら、せめて一太刀浴びせようとシエルの懐へ飛び込み、槍を振るった。

ナーゲルの意地を込めた一撃は、シエルの胸元に吸い込まれるように向かい、当たる直前でシエルは身体をひねり、かわした。

いわゆるターンで突きを避け、その回転の勢いを乗せた裏拳がナーゲルのコメカミに命中する。

体勢の崩れたナーゲルは、その澄んだ瞳に自らを狙うボレアスラUNCHャーの砲口を映した。

「これがアナタへの子守歌っ！」

零距离で放たれた砲撃は、ナーゲルの意地と日向の鼻っ柱を打ち砕くには十分すぎる威力だった。

Fire Storm (後書き)

話しの分割をミスりました。日向との一戦目は前話につけた方が良かったかな。

陸郎とシエルには

「もう、勝った気でいるな」

「では、再教育してやるとするか」

というセリフを言わせただですが、コレはむしろムルメルティア型に言わせたいので止めました。

以下、次回予告

バトルに勝ってポイントが増えた陸郎はホビーショップ「コリドール」へ買い物に向かう。

次回「ルートオープン」

3：ルートオープン（前書き）

バトルに勝利した陸郎はサッサと帰った。そして翌日――。

3：ルートオープン

小松野陸郎は今日も早く起きだして、日課のランニングに向かう。さて、マスターである陸郎が早起きなら、その神姫もまた、早起きである。

「う……ん、もう朝、ですよ」

ヴィルヘルミーネはもぞもぞとクレイドルから起き出した。

「んん」。おはよう、ヴィルヘルミーネ」

「おはよう、シエル。マスターは？」

リアルマネーで1万円もするベッド型クレイドルから這い出た2人は辺りを見回す。

当然だが、既に陸郎の姿は無く、薄暗い室内には何の気配も無い。「マスターは走りに行ってるみたいね」

シエルが明かりをつけながら、ベッドの上に置かれた寝間着を見つけて言った。

明るくなった部屋。ヴィルヘルミーネにとり、そこに陸郎がいないのは寂しい事だったが、いつもの事でもあった。

「マスター。おはようございます」

とりあえず陸郎の代わりに近くにあったウサギの人形に朝の挨拶をするヴィルヘルミーネ。そして、それを怪訝そうに見るシエル。

「なに、してるの？」

「マスターに言えないから、ウサギさんに聞いてもらいました」

「ふーん。あたしもやっところかな」

何故か迷彩服を着て鉄砲を持つてるウサギの人形。そしてそれに声をかける神姫という奇妙な光景が広がった。

「ただいま」

「あ、マスター。お帰りなさい」

トレーニングを終えて帰った陸郎が玄関を開けると、ヴィルヘルミーネが待ち構えるようにして出迎えた。

「今日は、トーストに挑戦しました！」

「おお」

先導するヴィルヘルミーネについてダイニングキッチンへと行けば、陸郎の目には見事な焼き加減のトーストが目に入った。

そう、見事にトーストだけである。

「マスター。あたし、やったよ！」

しかし、トーストを乗せた皿の前で達成感溢れる笑顔のシエルと、褒めて下さいと言わんばかりの期待した顔のヴィルヘルミーネに挟まれ、陸郎は――。

「ああ。良くやった！」

そう言って、2人を撫でるのだった。

……結局、飲み物だけは陸郎がシャワーを浴びてる間に用意した。

「そういえば、神姫は味覚があるのか？」

ふと漏れた、陸郎の疑問。

コーヒーに入れようとしたミルクが跳ねてヴィルヘルミーネの顔にかかり、彼女がソレを指で掬って舐めたのを見て、なんとなく浮かんだ疑問だった。

「味覚。そう言えるかどうか疑問ですが、似たものは私たちにもありますよ」

「似たもの？」

煮え切らないヴィルヘルミーネの答えに質問を重ねる陸郎。

「はい。私たち神姫の元となったロボットには、軍用機もありました。その機体は毒ガスや薬物の検知も出来るモノだったそうです」

「ふむん。そこから発展して、擬似的な味覚を作り上げたわけか」
そこに到達するまでどれほどの努力があったのだろう。それをこの小さな神姫に納めるとは、と感動すら覚える陸郎。

ヴィルヘルミーネは、それと意識せずに見つめてくる陸郎の視線に晒され、頬を赤く染めて顔を伏せた。

「あの、マスター。見つめられると、そのう、恥ずかしいです」

「ああ、ごめんごめん。……とりあえず、顔を拭こうか」

ヴィルヘルミーネに顔を上げさせ、ティッシュで優しく拭く陸郎。傍から見るとどう映るのかを想像してしまい、陸郎もまた赤くなるのだった。

「で、あたしが新聞取って来てる間に何イチャイチャしてるのかなー?」「スキンシップだ。何か問題が?」

新聞を背負って、笑顔だが怒りのオーラすら漂うシエルに陸郎は、逆に開き直ってみせた。

「じゃあ、新聞を取って来たあたしには?」

「言葉で労うのと頭を撫でるのと、どっちが好みかな」

「じゃあ、撫でて」

そう言ってテーブルの上に飛び上がり、新聞を置いて座り込むシエル。

陸郎は新聞をパリパリと捲りながらシエルの頭を撫でる。

「マスターって、お金持ちなの?」

「は?」

唐突な質問に、陸郎は間の抜けた声を出した。

「だって、新聞は毎日取ってるし、あたし達にもお金を使って、エアガンも買ってる。住んでるマンションもそこその物件だし。余程裕福なのかなって」

シエルの言葉に、ヴィルヘルミーネもうんうんと頷いている。

「確かに、お金の心配はしなくていい身分だね」

陸郎は新聞をたたみ、腕を組んで少し考えた。

「どこまで話したものかな。私の左目が見えないという事は知っているな?」

シエルとヴィルヘルミーネはコクリと頷いた。

「これは最初からではなくて、以前、仕事中の事故で失明したんだ。その結果、仕事を続けられなくなっただけ」

左目に手をやり、カラーコンタクトを外す陸郎。瞳孔が開き、色素が抜けて灰色になった瞳がそこにあつた。

「不気味だろう？ 仕事を辞めざるを得なくなった私は、保険金と障害年金を貰っている」 目を再びコンタクトで隠し、2人の反応を見る陸郎。シエルとヴィルヘルミーネはどう反応しているかわからず押し黙った。

「事故の時に責任者だったのが、今の私の雇い主の弟さんでね。責任を感じてか、仕事を紹介してくるたのさ。好条件だね」

それが、陸郎が趣味を存分に楽しめる理由。

「マスター、ごめん。あたし……」

陸郎は俯くシエルの頭を優しく撫でる。

「いいんだよ。言うべき事だった。むしろ、早めに言えて良かった」

「うう、マスター。私は何の考えもなしに、グスッ」

「ヴィルヘルミーネも泣かないでくれ。あ、そうだ」

2人を撫でながら、陸郎はわざとらしく話題の転換を図る。

「お金の話で思い出した。昨日のバトルでポイントが増えたし、今日は早上がりだから、帰ったら装備を買いに行こう。そうしよう」

陸郎は努めて明るく言っただけ席を立ち、食器の片付けに入るのだった。

3：ルートオープン（後書き）

以上、小松野陸郎が、あまり仕事もせず趣味を楽しめる理由でした。

2040年には、人工眼球とかもありそうなものですけどね。眼鏡型のは2010年に作られてますし。

次回予告

ホビーショップ「コリドー」に着いた陸郎達は、店主からアイテムを買い、武装神姫の大会があるという話を聞く。
次回、「戦争は浪漫だ」

戦争（バトル）は浪漫だ（前書き）

ホビーショップ「コリドー」に着いた陸郎達。陸郎は店主と話し

……

戦争（バトル）は浪漫だ

何故かいつもより丁寧な松島から昨日のお礼を言われたり、浜松から今度またアルバイトの面接を行うと言われたりと、今日の陸郎は忙しかった。

そして、仕事を午後3時に終えた陸郎は、早々と帰宅し、休憩もそこそこにシエルとヴィルヘルミーネを連れて外出した。

向かった先は、お馴染みのホビーショップ「コリドー」である。

空中回廊の名前通り、この店は空物の模型、ラジコンが豊富で、神姫関連の商品はあまり充実していない。

それでも陸郎がここに来たのは、以前からの知り合いで、前回の別れ方だと雰囲気が悪くなるという事に加え、何と言ってもシエルとヴィルヘルミーネを購入した店だからだ。

「マスターの運転はやっぱり左側がおろそかになってます」

目的地に着いた途端に、ヴィルヘルミーネがそう言った。

助手席に座るヴィルヘルミーネの言葉はいきなり過ぎて、陸郎は一瞬何の話しか分からなかった。

分からないまま顔を向けた陸郎をヴィルヘルミーネが見返す。澄んだ蒼い瞳が、陸郎の反応を待っていた。

「……不便なのは確かだ」

いちいち頭を左右に振るのは面倒で、左側の確認が疎かになりがちなのは確かだった。

「マスター。それって危くない？」

シエルの言葉ももつともで、陸郎は黙って頷いた。

「それなら、私が左側を見ます」

ダッシュボードに登って仁王立ちしたヴィルヘルミーネは、そう言い放った。

「私が目の代わりに見ますから、だから、その……」

言葉を切り、陸郎を上目遣いに見上げるヴィルヘルミーネ。

「隣に居ても良いですか？」

その瞳は決意を湛え、陸郎の意識を捉えて離さなかった。

「勿論だ。むしろ、こちらからお願いしたい」

陸郎のその言葉にほうと安堵の息をはくヴィルヘルミーネ。

陸郎は思う。何がそこまで安堵させるのか、と。逆に考えれば、そこまで不安にしまったという事だからだ。

朝のやりとりでそこまで不安にしまったのなら、やはり言うべきではなかったかと思い、いやそれは違^{かぎ}うと頭を振る。

その様子を見て、またも不安そうな顔をするヴィルヘルミーネを安心させようと、陸郎は笑って語りかける。

「目の代わりなどと言わず、ヴィルヘルミーネはヴィルヘルミーネとして隣に居てほしい」

「マスター、ありがとうございます」

優しく微笑む陸郎に、ヴィルヘルミーネも大きく頷くのだった。

「マスターがあたしを放置して苛める」

「そんなことはない」

膨れっ面のシエルと、ヴィルヘルミーネを胸ポケットに納めて車から出る陸郎。予算を少々オーバーする覚悟を決めたのだった。

「小松野か。昨日はお楽しみだったらしいね」 店内に入った陸郎達を迎えたのは、相変わらず暇そうにしている店主だった。

「昨日？」

「三井が来て行っただぜ。ここの所、躍進著しい安房戸姉弟を倒したそうじゃないか」

「たまたまだよ。少しの幸運と、何より神姫のお陰だ」

そう言っ^て胸ポケットの2人を指差す陸郎だが、2人は不満そうな声を上げる。

「マスターは自分の事を過小評価しています」

「あたしもそう思う」

「そうかな？」

そんな3人のやり取りを見て、店主は笑いをもらした。

「ははは。仲がいいね。ウチは神姫関連の品揃えは大した事無いが、良ければ見て行ってくれ」

そう言つて positioning のレジ前に戻る店主。

陸郎はヴィルヘルミーネとシエルを胸ポケットから降ろすと、店内を適当に見て回った。

「ふむん。こんな所かな」

色々と買い物カゴに入れた陸郎は、代金を神姫ポイントと現金で支払う。

昨日のバトルでは、松島ノアナスタシアとのバトルで300ポイント、日向ノナゲルとのバトル二回で300ポイント、最後のタッグバトルで800ポイント。合計1400ポイントを得ていた。

日本円に換算すれば14万円になり、金額的には今回の買い物物を全てを賄い切れるのだが、神姫関連の商品以外も買ったので現金も使ったのだ。

神姫ポイントは神姫関連の商品にしか使えない。その上、換金も出来ないという事になっている。

「ところで店主。店主は Kamoi Corporation という会社を知らないか？」

買った品物を袋に入れて貰いながら、ついでに聞いてみた陸郎の言葉に店主の手が止まる。

「小松野。その会社の武器に手を出したのか？」

「いや。その営業を名乗る人間に声を掛けられた。ヤバイ会社なのか？」

胡散臭さは感じたが、深く考えていなかった陸郎。しかし、店主の目は真剣だった。

「あそこの武器は駄目だ。威力は高いんだ。だがな……」

店主は陸郎に顔を寄せて声を潜めて言う。

「威力を高めるのにリミッターを解除してるのさ。しかも、使用者側にダメージを与える程にね」

それはもう非常に腹立たしげに、吐き捨てるような言い方だった。「随分と詳しいみたいだが、使った事があるのか？」

「いや。以前に一度、仕入れたんだが、客からクレームが来たんだ。だから覚えてる」

いやな話を聞いたもんだと、陸郎はため息をついた。

「とりあえず、後で見に行くでしょう」

「ああ。現物を見てみる。それと、コレはサービスだ」

店主は袋にエウ克蘭テ用カスタムパーツを入れた。

「冷却機器のウィッグだ。髪形を少し変えられる」

「付け髪か？　そうか、髪で放熱してたのか。でも、髪形をいじれてもな」

袋を受け取る陸郎。

シエルとヴィルヘルミーネはまだ見ているようなので、2人が来るまで話しをする。

「髪形を変えても、性能は大して変わらないんじゃないか？」

「性能はね。気分の問題だよ、武装紳士的には」

一部の神姫オーナーは自らを武装紳士と名乗る。

「彼らはパーツをアクセサリーと呼び、武装を整えることをドレスアップと言う」

「戦場は社交場か」

「いやいや、ちよつと違う。戦場は舞踏会だ」

店主はどや顔をして言った。

「戦争は浪漫だ。この現代において、短時間でこれほど深く互いを知る方法は、中々ないんじゃないか？」

「ロマンねえ」　バトルに求めるものは人それぞれで、陸郎にもやはりそういったものはあるのだった。

戦争（バトル）は浪漫だ（後書き）

次回予告

買い物を終えた陸郎は、考えついた武装の自作にとりかかる。
次回「シャボン玉」

更新が少々遅れると思います。

シャボン玉（前書き）

買い物を終えた陸郎。武装の自作に挑戦するが、陸郎の前に大きな壁が立ちふさがる。

シャボン玉

膨らむ。

白い風船が膨らみ、そのままコロコロとコンクリート剥き出しの床を転がった。

「やはり重心位置が悪いか」

「問題はソコじゃないダロ」

買い物を終えた陸郎はサバゲーのフィールドに来ていた。ただし、今回は管理棟にお邪魔している。

この管理棟にはエアガンやその他装備品をカスタマイズするための部屋があり、工具を借りて自分で工作する事ができる。

そして、今の陸郎のようにエアガン以外にも、プラモデルやロボットの製作、改造をすることも出来た。

「やはりビット一つでは揚力が足りないか」

「形状に問題が有るんじゃないか？」

陸郎がジャーヘッドの手を借りて製作しているのは、ビットに風船をくつつけたような物だった。

「マスター。これはいったい何なのでしょう？」

「これか？ デコイだ」

ヴィルヘルミーネが何物が判断しかねたモノ。それは長さ15センチ、直径4センチの細長い風船。炭酸ガスで膨らませたソレを、ビットで適当に動かして囷とする。

「名付けて『アーンバールン』だ」

「あの、マスター。それはちょっと」

「ネーミングセンスが無いノハ、相変わラズだな」

自覚している事ではあったが、味方がいない事に泣きたくなる陸郎だった。

「そういえば、シエルは？」

「コーヒーを淹れてくると言っていましたか」

「それにしても遅いな」

かれこれ20分は姿を見ていない。

「きつと、俺の造物主に捕まってルンだろウ」

ジャーヘッドの言う造物主はフィールドの管理人で、名前は我那覇志麻^{はしま}。自身もサバイバルゲームのチームリーダーをやっている。

「我那覇さん、いるのか。挨拶しておこうかな」

「やめておけ。可愛いモノを虐めてる時ハ、邪魔されたくないダロウからな——」

「誰が何を虐めるって？」

風船を膨らますのに夢中だった陸郎とジャーヘッドが振り向くと、開け放たれた入り口にコーヒーポットを持って佇む女がいた。

「コンニチハ。我那覇さん」

「ああ。しばらくだね。で、ジャーヘッド？」

「いえいえ。何も言っておりませんです。ハイ」

やたら流暢に喋るジャーヘッドにツカツカと近寄り、思い切り見下す我那覇。

「ジャーヘッド。あまりアタシをイライラさせないことだねエ。でないと——ぶつよ？」

「はい。申し訳アリマセン」

迫力に負け、大人しく頭を下げるジャーヘッドであった。

「我那覇さん。神姫を見ませんでしたか？」

さつきからシエルがいないのだ。

「神姫？ ああ、あのお嬢ちゃんかい。それならソコにいるよ」

我那覇の指し示す方には、戸口からトボトボ歩いてくるシエルの姿があった。

「マスター。あたし、お嫁に行けなくなっちゃったよ」

「もう私の所に来てるじゃないか」

「あ、う」

真っ赤になるシエルに声を掛けようとした陸郎だが、その前にシ

エルが陸郎の後ろに立つ我那覇を見つけた。

「ああつ！ さっきの！」

叫んで、陸郎の影に逃げるように隠れるシエル。いったい何があったのか。

「マスター。この人は？」

「このフィールドを管理している我那覇さんだ」

「そんなに怯えなくていいじゃないかい。取って食いやしないよ」

我那覇はそう言うが、シエルの反応を見るに、本当に食われでもしたのではないかと思う陸郎だった。

「我那覇さん、いったい何をしたんですか？」

「フフフ。特には何も」

妖しい笑みを浮かべる我那覇に気圧され、陸郎は追及をやめた。

「と、とりあえず、我那覇さん。電気系統で手伝ってほしい部分があるんですが」

「そうかい？ しょうがないねえ」

陸郎から作っているモノの概念図を受け取る我那覇。

「ふうん。興味深いじゃないか。ジャーヘッドよりは簡単だね」

「それはまあ、こちらは自律したロボットですカラ」

陸郎と我那覇、ジャーヘッドの3人による製作がスタートした。

数時間が経過し、日が暮れ始めた頃にソレは完成した。

「出来た、完成だ！」

神姫程の大きさを持つソレは、3種類作られた。

1型——普通に風船、図。

2型——攻撃を受けると破裂してアルミ箔を撒く。一定時間ロックオン不可となる。

3型——レーダーが着いている。レールアクションを発動されても、ロックオンが外れなくなる。

ただの風船にこれだけの機能を付ける事は陸郎には出来ず、我那覇が中心になって製作した。

「我那覇さん、ありがとうございました。このお礼は」

「なあと、次に花冠へ行った時、サービスしてくれればそれでいいさ」

そう言っただけで笑う我那覇だが、ふと気付いたように言った。

「こついった物は、登録に時間と金がかかるもんじゃないのかい？」

「そつえばそうですね」

携帯電話を出して検索する陸郎。その手が唐突に止まった。

神姫バトルの運営による公式ホームページには、次のように書かれていた。

【神姫武装の新規登録について】

『新しく開発、製作された武装の登録には1000神姫ポイントが必要となります』

『登録には、3日から最大で1ヶ月かかります』

『武装のカスタマイズについては500神姫ポイントが必要です』

「どうしたんだい、小松野。なにに……」『バーチャルバトルで使用するエフェクトによっては、さらに高額になることもあります』
「か。大変だねえ」

シャボン玉（後書き）

シャボン玉は屋根まで飛ばずに割れました、とき。
まあ、割れずに残ったものもあったのです。

次回予告

製作した砲兵器の中から1型のみは何とか登録した陸郎。
専用の新兵器を与えられたヴィルヘルミーネと、ウィツグを付けて能力が向上したシエル。全ては順調に思えたが……。
次回、「Identification」

4: Identification (前書き)

装備の登録申請をした陸郎。特に何事もない日常のはずだが……

4: Identification

どうにかこうにか凶兵器の1型は登録出来た。厳密には手続きだけだが。

陸郎は一人で隣街の駅前にある神姫センターまで出向き、武装の登録申請を行った。手間ではあったが、必要な手続きだった。

自宅で待つヴィルヘルミーネとシエルには悪いと思いつつ、ここまで来たらついでにと、陸郎は『Kamoi Corporation』のショップを探した。

見つかったのは、ジャンクショップなどの並ぶ通りの奥まった場所。柄の悪い連中もいたので、陸郎は入るのをやめた。

「ただいま」

昼前に帰宅した陸郎は、家の奥から聞こえる物音に首を傾げた。

「マスター。おかえり」

軽い足音とともに現れたシエル。その手には布巾が握られていて、どうやら掃除をしていたらしい。

「マスターの部屋、だいぶキレイになったよ」

「そうか。ありがとう」

「ふふ。どういたしまして」

長いツインテールをなびかせ、穏やかに笑うシエル。陸郎は、これは何か言うべきだと思った。

「シエル。その髪型、よく似合ってる。キレイだよ」

「え？ あ、はい。ありがとうございます」

目を白黒させるシエルとともに、自室のドアを開いて中に入る陸郎。その視界の隅を掠めるように影が落ちた。

「危ない！」

「え？ キヤッ！」

陸郎が咄嗟に放った蹴りがシエルの頭上を通過し、“ソレ”を弾き飛ばす。

迷彩服を着たウサギの人形が壁に当たってポキリと折れた。

「パッキー？」

「マスター！ すいません！」

慌てた様子のヴィルヘルミーネが、陸郎の下に飛んできた。

「ごめんなさい。私、ぼうつとしちゃって」

「いや。たいした事ないから大丈夫だ。なあ、シエル」

「うん。あたしも何ともないよ」

2人の答えを聞いてホッとするヴィルヘルミーネ。陸郎は片付けをシエルとヴィルヘルミーネに任せて着替える事にした。

（しかし……なんだ？）

ズボンを脱いだ陸郎は、足についた後を撫でた。

軽く難いだ程度の蹴りだったはずが、赤く跡がつき、かなりの強さでぶつかったようだった。

パッキー——ウサギの人形——も、机の上に置いてあったのに。

これではまるで、入り口に向かって投げつけたように思える。

「まさか、な」

泣きそうになりながら破片を拾い集めるヴィルヘルミーネ。陸郎はその様子を見つめながら呟いた。

4: Identification (後書き)

パッキーは漫画『Cat Shit One!』のキャラクターです。

次回予告

実戦で凶兵器を試す事にした陸郎。ゲームセンターへと向かったのだが……

次回、「相身互い」

相身互い（前書き）

今回は少し短いです。

新装備を身に付け、ゲームセンターに向かう陸郎達。

相身互い

3日というのは長いのか短いのか考える陸郎だが、少なくとも神姫にとつては長いらしい。

「ふふ。久しぶりのバトルだよ。腕がなるね」

「イメージトレーニングだけでは、感覚が鈍ってしまいますから」
ウキウキした様子のシエルとヴィルヘルミーネ。そんな2人につられるようにして、陸郎もバトルへの期待を高めるのだった。

駅近くの駐車場に車を止めて歩く陸郎。あと少してゲームセンタ―に着くという所で、どこから言い争う声が聞こえた。

「何だろうか？」

「あ！ マスター、あそこです！」

ヴィルヘルミーネが指し示した方向には、女の子が一人と、その子を取り囲む柄の悪い男が3人いる。

「大変！ 女の子が絡まれてるみたい」

「マスター！」

シエルとヴィルヘルミーネに言われるまでもなく、陸郎は走り出していた。

「おい。何をしている？」

3人組に声をかける陸郎。その周りには他にも人がいたが、誰も彼も関わり合う事を避けて通り過ぎて行く。

「あ？ なんだあ？」

「あ、あの！ 助けて下さい！」

振り向いた柄の悪い男の向こうから、女の子が縋るような瞳を陸郎に向ける。

「兄ちゃんよお。カッコつけてると痛い目を見るぜえ」

「ほう。自分達がカッコ悪いという自覚はあったのか」

半分笑いながら言う陸郎に、男はいきり立って拳を振り上げた。

陸郎は突っ込んで来た男の拳を逸らしながら足を引っ掛けて転ばせる。

「ぬがぁぁ！」

男は派手に回転しながら倒れた。

「どうした？ 貧血か」

「て、テメエ！」

残る2人が声を荒げながら一步踏み出すと、それにあわせて陸郎は後退る。そして

「ぐげ」

「おや？ 何か踏んだかな」

「アニキに何しやがる！」

倒れていた男を踏みつけた陸郎。そしてソコに意識を引き付けられた男達。陸郎の後ろから地面スレスレを飛んで行った小さな人影には気が付かなかった。

男達が掴みかかってくるのを陸郎はヒラリヒラリとかわし、踵きびすを返して離脱した。

「待てや、コラァ！」

声は上げるが追いかけてようとはしない男達。何故なら、男達の目的は女の子であり、陸郎が逃げ出したなら邪魔は入らないからだ。

「……あれ？」

「いないぞ」

しかし、先ほどまでいたはずの少女の姿はそこになく、追いかけるようにもどこに行ったか分からないのであった。

「助けて下さり、ありがとうございました」

「別にいいさ。特に何もしていないし」

陸郎は表通りで合流した少女にお礼を言われていた。

シエルとヴィルヘルミーネに誘導された少女は、男達が陸郎に注意を向けていり間に逃げ出し、無事に表通りに辿り着いていた。

「でも、私は助かりました。きちんとお礼をしたいです」

「なら、シエルとヴィルヘルミーネに言ってくればいい」

そう言って2人を指差す陸郎だが、当の2人は首を横に振った。

「あたしはマスターの指示に従っただけだよ」

「私も、感謝されるべきなのはマスターだと思います」

その言葉に頬を掻く陸郎。照れているのは明らかだった。

「まあ、誰がとかは置いておこう。もう少し移動した方がいい」

「分かりました」

陸郎は少女を連れて人通りの多い方へと向かった。

「そういえば、まだ名乗っていませんでした。私は湯乃丸ゆのまる白緒しろおとい
います」

「私は小松野陸郎。湯乃丸さん？ どこかで聞いたな」 人通りの
多い道に出た陸郎は、当初の目的地のゲームセンターを目指した。

「湯乃丸さん。私達はゲームセンターに行きますが、あなたはど
うしますか？」

「あ、私達もゲームセンターに行きます。私のことは白緒と呼ん
で下さい」

「そうですか。では白緒さん、行きましょう」

余程不安なのか、陸郎にくっつくようにして歩く湯乃丸。シエル
とヴィルヘルミーネが凄い目つきになったが、それよりも陸郎は湯
乃丸の言葉が気になった。

「私『達』？」

「あ、はい。私と、この子です」

湯乃丸は持っていた鞆から大事そうに“ソレ”を取り出した。

「これは、神姫？」

「はい。私の神姫、未来みらいです」 スリープモードになっている湯乃
丸の神姫は、陸郎の見たことがない神姫だった。

「マスター。確かジュービジー型ですよ」

「ふむん。名前は聞いた事があるな」

「あたしも。初めて見たよ」

湯乃丸の手の中に収まっている未来は、スリープモードだという

事もあつてか、とても頼りなさげに見えた。

「一応、その子にも今日の事は教えておいた方がいいね」

「いえ、そのですね……」

絡まれた事を伝えるべきだと言う陸郎に、なにか言いづらそうにする湯乃丸。

「この子、今日の事は知ってるんです」

「え？　なんで」

スリープモードの神姫が外部の状況を把握出来るとは思えず、陸郎は尋ねた。

「この子、最初は起きていたんですけど、気絶しちゃったんです」

「神姫って気絶するの？」

陸郎は変な所で神姫メーカーのこだわりを感じた。

「しかし、連中はどうして白緒さんに絡んだんだろうか」

「さあ、それは……」

話しながら歩いていると、ようやくゲームセンターに到着した。

「本当にありがとうございました」

「いや、いいって。それじゃ」

陸郎と湯乃丸はゲームセンター内にある整備ショップで別れた。

湯乃丸の神姫が異常無いか調べるためである。

是非お礼をと言つて住所などを聞いてくる湯乃丸に、陸郎はゲームセンターでバトルをやつていればその内会えるだろうと言い、そのまま立ち去った。

さて、対戦台に着いた陸郎だが、そこで嬉しくない再会をする。

「デメエ、見つけたぜ！」

「よくもアニキをやってくれたな！」

その場に現れた頭の悪そうな二人組みは、非常に見覚えがあつた。その手には、しっかりと武装神姫が握られている。

「神姫のマスターだったのか、コイツ達。紳士には程遠いけど」

「うわあ。神姫が可哀想」

「マスター！ シエルも、相手の方に失礼ですよ！」

ヴィルヘルミーネは一人、陸郎とシエルを窘めるが、それが陸郎には気に入らなかった。

「決めた。叩き潰す」

「どうしてそうなるんですか」

相手の準備は万端らしく、陸郎も対戦台に座った。

相身互い（後書き）

次回予告

チンピラ二人を撃破する陸郎は神姫センター主催のトーナメント
出場権を手に入れる。

次回：予定は未定

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7854y/>

武装神姫サバゲーマーズ

2011年12月19日09時45分発行